朝鮮珍花蕣集

214
3

帝國圖書館藏

ガラス使用

朝鮮珍花蕣集

全

214
3

ガラス使用

帝國圖書館藏

朝鮮珍花蕣集序

蕣花は中に牽牛をもて毎旦
高[illegible]れりきれちらく朝まるす
庭つ鳥啼声たぬきくはよ[illegible]催し袖く
天の戸と出ぬにぞ見しきを寄り白ひこゝ
いときこうかなふきとに薫乃更によ飛て
まうかんぬりしもう入の[illegible]を宇[illegible]屋
ゆふ遊坂にみたてまことにあはさ[illegible]

花好なかにも殊に朝鮮を好くこゝろざし高
かしこ濃紫ならしくのおもきみもてあそびもか
なれぬ色を見出しけるふるされし八茶くるの
あましてとさえせる事なれはのくいたりし
なる花びらく見せこそおぼえ候梅桜の
やうかう菊紅葉の色なとにわるゝ如くおほよ
年山神業濃いとゞ海のさまに言葉にあふるゝ
なかば葉縁かしての人横に年をひ知るまじめかなく

うふしろ木のきゝうへわざに風情をもとめける
き閑しを紫にて季友峰岸兼祐堂濃
めしゆうく是非んなよせける世りたまひかき
花をあつめまゝにはなやかしえつゝうきえあゝに
侍く李以て移りぬれといへ心をもふかくいとおよつ
うつさなく是かぬるみせゝるりしくにあたもぬく
あけ紫英をもめてもくをきくふうきし
さつなるおうし好人濃なるさゝめふりして

一とせ此ものを詳らかにかゝち後に年
う勤さしめん名とし高梓にちかし
せらるゝを理おほしてよに伝へ合せしと
たゞ菊ならぬ稲垣のいちそに謂へる好を
木なるし須るに友なるによしいとゆかし
なからぬ好まぬのみかくかくて高かく保
よ仍て大らば廣田村杜浦東の里に
書きす家津
柏翁

朝鮮珍花彙集　凡例

○此書に衰る所の種々好者の意々まて一品ごとにさやびなる名のけそあるといへども或ハ花の咲やう葉の模様おゝて通称を附名とせりて種類とすゆゑに其余下に名ハ好者の意々変る所做さゝと志るべし又通称ある所に傳るものゝハ余がいうたに名づくるをも記してたとへバ龍田川の余下に余が名づくる所ゆゑくと志るすをもぐし類を推てしるべし

○今好者の意々まゝ名づくるがごとくおしひ葉の遣ひ模様咲ホのさまうしづれ違ひとかいへる品類を挙るにおいてハ何百品ともなるべしそれて挙るにいとまなしよてはぶきに載る所模様四十種品類百六十品とし

○園中に常紫丸咲の手地又常紫模様丸咲の二種ハ終挙る

ガラス使用

またいさ葉のことゝ同じけれバいさ葉と挙て常葉にあるなれハ
ここに次その中に残月越路の月朧月朝霞の四種のことを
類ひたる残月越路の月朧月を常葉に丸咲とハいへども底紅
うつりさま別種なるがゆゑ爰に挙る又朝霞と挙るハ此花の
麗しきにいはゞいさ葉のことなれどもとて挙る又霧の笆
をいさ葉に撫桔丸咲の条をあげて一種としてかぞへしハ此笆
のうちにも此しぼり初なりよりしてをはりまで模やうの
なりゆくのなしよき一種といふべくしばらくまのあれをかゝ一やう
ならざる條をしれなり
○まんぢう咲桔梗咲の二種ハ別種なる種とことなるべし境に
よりて渾どもことなれどもよりて出ざるくまんぢう咲によりて又桜咲
梅咲も花もおしべの差別ありこれも通称のことなれよなり

○葉花種にいたり常葉といへどもおしべの違ひありて爰に挙る
ふいりのたぐひによりて常葉細葉紅葉などなし葉葵葉
等をしらしむるにあれ名品を挙る種類ことごとを除いたれバ
雲井の条下に細葉あまりくをおし異と志るしあれなり
略を推て知るべし
○いさ葉と称するものハ葉に白く斑の入るをいふ俗称して
ふ入葉といふいさそのゝ未考（今葉も青葉なりよハ／へりふいりといふもの未見）
○惣じて花色のうちにて称するものハ瑠璃色のことしる
花田なるに紅と多く常なるこれなり天氣のおしみとれ
を濃花田といひ紅色のなにかの紙に花田といふ藍色と称
するものハ淡黄なる天氣のおしあるものをいふなるべし紫と
称するものゝ又名の色ならしきものとおしく似よるを間に

はるちかきまで花色のうつろはねバ日請よろしき場所日影の

差別もはるかに紅の色など暑中より地並ニうけるゆゑ

色薄し。葭簀をもつて日覆をし夜ハ簀をはづして夜露を

受くべし かくすれバ花色もよろしく又葉ニもやけず奇麗

ものはいさゝか葉などもうるはしく見ゆることなり鉢植の

にいたつて地植のことハ場所の広ければ日覆も行届まじ

されども又やる事もあらバ又ハ標浅黄など筒へ入

の移りかはることあり又なにとのあはひをあげさふにて塩

雑をも（花色の内黄色又磨きり縫くろふちあふち白ニのことハいまさらなれバ）

○朝鮮朝白又唐朝顔と称するものはありて本草綱目ニ見ゆ

蔓陀羅花なり花にて花形ハ似たりといへども蔓もなく

葉にも異なり又针朝白と称するものハ花形ハ似たりといへども

葉ニも実なりこれは中ニ花ひらきて後ニ含む実ある故この

丁子なども実ともみえず救荒本草ニ見えて天茄児といへる

名称あれバしるべし

○圓中大輪と称するもの丸咲のうちにあれど桜咲ちらし咲ニも

あることなりいづれも肥を強くして花数を減し作りて

咲せることなりして自然のことなりがたし されどもいづれのもの

ありとも肥をつよくすれバ大輪ニ咲するものならん摘するに

多くハ花の蔕を延くるものゝれハ斯大りんも咲ぬ圓中咲

切咲と称するものゝ自然ニ花大なり是等までも大りんなりよ

あつさものゝ種好者の考を候つ

○培養のことハ花壇大全ニくハしくあるもそのものゝ朝白を

さげまき称するもの生じ其の生しき場ニ植しいつ咲ものなれば

さのとちはよしけりしきへの入べきところにあしくはされども足を
鉢植にすることは地勢（ちせい）を借（か）らずとても助（たす）けに水（みづ）をすべし
のちはしらず何れにてもおしなべ肥（こえ）をもて害（がい）しいたるべしあまり
あへはたえて實（み）をむすぶことなくして種絶（たえ）うしなふ
これなり好事此（これ）の考（かんがへ）あるべし

○寒菊（かんぎく）は圖（づ）をしるす一種余（よ）插（さ）ぞうしに肥（こえ）のほをなしめんとしてさへ
よげむら文字をとて植（う）ることは八月やけしていまするよて種を
小變（へんくわ）作るとそのわり式を樹（うゑ）三角なるもの莖（うとび）平らなる
それならども出ずなり又木立（きだち）の中にもなりいろいろ變化
し珠（ちんてい）種の中に早くとれ出るもなりまでにされどもを
あれ小寒（こ）に咲むとあるすまれなり實（え）のつるのぞん得ざ變性（へんしやう）
もうるものなり是亦珠種なども思ひもよらず年あられ一年（ひととし）
俗（ぞく）のこれはうしくね（よくよし）まゑえむをかくるべしさるゆゑに
尋來の一種なることれを種類にもくはしからずにいまだ考の
及ばざる一奇（いつき）あるものは何方（いづかた）にもあまた多くれ花壇（くわだん）の内
などえは彼所（かしこ）の庭（みそ）背戸（せど）などに何（なに）の木をとうゑまでもいさ
紫あり又紫紅（えごかう）の變（かは）るも地（とち）などにあるその此地あるよ
種を蒔（まき）うへんど珠種を出ぬべし

○此（さく）まふ又朝白なることれを考るに

○牽牛子（ケンゴシ）（陶弘景曰ク此藥始テ出ツ田野ニ人牽テ牛ヲ謝ス藥ヲ故ニ以テ名ク之ヲ） 異名 黒丑（綱目） 白丑（同上） 盆瓶草（同上） 狗耳草（救荒本艸） 草金鈴（炮炙論） 假君子（輟耕録） 黒白江南花（和名シホリアサガ）（本物類品隲○花鏡曰近又有異種一本上開二色花者俗因名之曰黒白江南花） 蛮名 コロクフラム 和名 阿左可保（順抄）

伊川撃壌集

花庵多ニ牽牛ヲ清晨ニ始テ開ク日出テ巳ニ瘁（シボム）花雖モ甚美ナリト而

不能留賞

望遠雲凝岫粧餘黛散鈿縹嚢承暁露翠蓋拂秋烟
嚮暮非葵比凋零在槿先才供少須翫空廢日高眠

和花庵上牽牛花

葉闊深如幄花繁翠似鈿瀼瀼零暁露冪冪蔽晴烟
謝既成番次開仍有後先主人凝佇苦長是廢朝眠

新鼓題
後水尾院御製

朝貝をはかなくにさきつへてけふりひさしき花よるのくる

けり花世にもさしく槿蕣混じて牽牛花と同じくせるを陸機疏に曰蕣一名木槿といへり毛詩鄭風曰有女同車顔如舜華と云々今の点かくれバよし世俗えよし天暦の頃までハ顔きしちを蕣のおよしと読るゝこと順抄に蕣（和名木波知須）とぞかけりたるを朗詠集に槿をあさがほと訓ぜいはしく槿を朝貝とよみたるより蕣にをも後人ハあさがほの花と点じたるなるべし歌の詞にハ槿と出て弁のさねちられ牽牛花によあやまりされバ槿蕣ともに倭訓のおもむきをかへて牽牛花と混ぜられ大に誤るなり按ずるに木槿を朝に栄夕に落る花なり牽牛花ハ本草綱目に曰花朶如鼓子花但碧色日出開日西萎云々注しく暮て後ぞに咲花を朝貝といへるなれバ花の盛おなじきをとりて混ぜ侍るとみゆ下学集槿花の下に宋人の詩を引て曰槿華離下點秋事早有牽牛上竹来云々けり詩の意又前にいふ撃壌集の詩によりても槿花と牽牛花と別種なる事を知るべし槿花ハ木波知須といふべきを此和名抄にせざりしてむくげといふ（多識篇に云手久計○むくげハ木槿の音訛れるなるべし江らんそてハそれをあらすといふ）芸蕣亦

ガラス使用

同物なり兼山紀聞に云朗詠集に牽牛花と記すべきを槿花と書て漢にも槿花の詩文をとられて和漢混ぜるは四條大納言公任卿の誤なりといふ新撰字鏡に桔梗をあさがほと訓ぜし萬葉集に読るあさがほは朝露負て咲といへど夕かげにこそ咲まさりけれ大和の方言に旋花(ひるがほ)をもあさがほといふ又和訓栞に云朝顔の義なり朝ごとに花さくをもて名づくる也云々兼山紀聞に云和語の意を解ざる人の云なりかへすがへすもうつくしきと見ゆれば女にたとへていふ夕がほもおなじことなれば牽牛花を野(のら)に咲る花の中にてもろくしほるものなれば いつのほどよりか朝がほの名の牽牛花に定まりたるなるべし させる要もなき俗もいふ解説ましく此なることにいつも成る人の癖なり又兼山紀聞に云公任卿とても誤(あやま)らるるまじきに

あら探ば混ぜかやくにうしなめてそよりてもあさがほの題にて牽牛花と書かしことかくはあるまじ 因(ちなみ)に云万葉集第八山上臣憶良(ヤマノヘノオミノコオクラ)詠(ヨメル)秋野花(ノ)歌二首 其一 秋野(アキノヌ)爾咲有(サキタル)花(ハナ)乎指折(オヨビヲリ)可伎(カキ)數者(カゾフレバ)七種花(ナナクサノハナ) 其二 芽之花(ハギガハナ)乎花(ヲバナ)葛花(クズバナ)瞿麦之花(ナデシコノハナ)姫部志(ヲミナヘシ)又藤袴(フヂバカマ)朝貌之花(アサガホノハナ) 此歌の朝貌を李時珍説に木槿といふ説にいりて思ふに木槿を四五月花咲ものにして花史左編に月令以為(ステ)候(トスト)といへり世とかれを秋草の内に入まじきもいかで木槿は草にはあらず木之又秋花の咲ものなれば牽牛花はそれはいまだ渡らざるものといへど此朝貌は何を詠(よむ)るなるに桔梗の訓のいふ本をとて見ればまさしく桔梗なるべし此秋の野にさきやつれ花の咲ぬるやあるべきはた又家に峯るかの朝貌なるとはれを考るに牽牛花の夕かげに咲すまじけるといふもいかで

又桔梗の花乃紺色（こんじやういろ）の名をへとりてよいふされバ桔梗花の名のけなぞ
咲始るを始と横（よこ）さくんも志ろくだいづ紅ゑ半分ハ白ざるべし
○三才圖會に本艸綱目ヲ引テ云ク七月生ス花ヲ其花不作辨ヲ又云
此花有テ深碧 浅碧 純白 浅紅色四種而紅ナル者稀也ナリと云ゝ是を
以て考ふるにいにしへハ九咲のミにして花の模様も京多くさ
ながざるなれと見ゆ追ゝ変生（へんしやう）して今さハ及びぬべくも
あるまじきものをかうして志つまるをとまごろ時分を越し翫（もてあそ）ぶ
人のなけれバ年々にして変生のものも出めぐしむるに従ふ
それハ志く余が培養（ばいやう）しつ試（こころみ）る接花のことを挙げおし
き考へも加へ同好の志ふかくさんのゝ指導（されん）るもさへ有るべし
さハ時分のつぼみをもて補ひたへうし 文化甲戌のとし春の
杪 西風羅波の庵梧まで小峰 苐画志るす

朝鮮珍花彙集

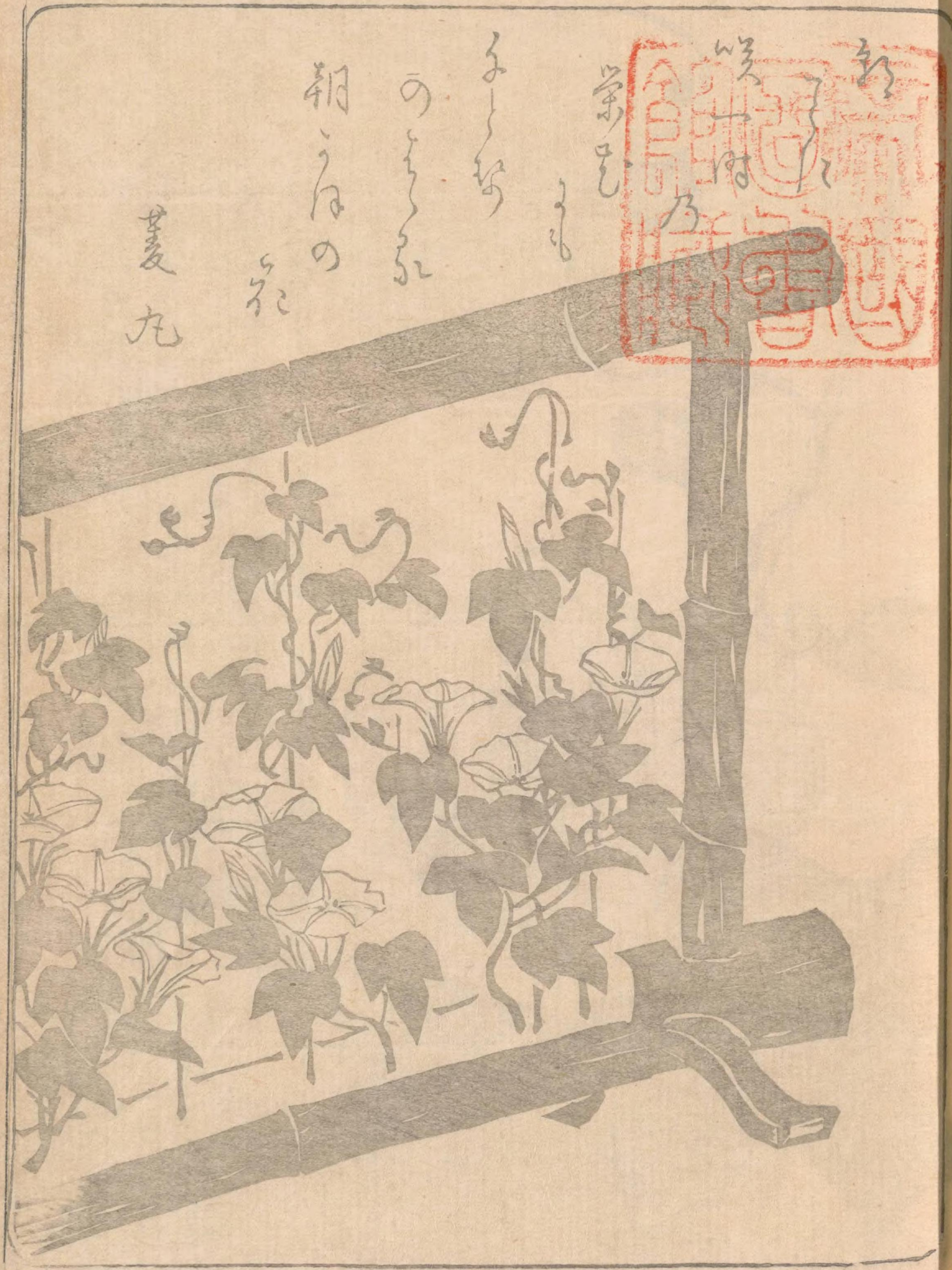
品目

○大輪（たいりん）	八品
○櫻咲（さくらざき）	十四品
○いさ紫縮咲	五品
○采咲（ざい）	四品
○野分（のわき）	一品
○乙女（をとめ）	二品
○染分（そめわけ）黄紫	一品
○針木咲（ぢうぎざ）	二品
○いさ紫臺咲	三品
○孔雀（くじやく）臺咲	二品
○いさ紫大輪	一品
○縮咲（ちぢみざき）	十四品
○葵紫縮咲（あふひで）	四品
○龍田川（たつたがは）	九品
○雲井（くもゐ）	一品
○黄紫（きゑ）	一品
○丸咲黄紫	二品
○臺咲（だい）	八品
○櫻臺咲	三品
○五手舟（いつてぶね）	三品

ガラス使用

あらはに
咲けは乃
栄えも
よ
千しなみ
のちらん
朝かほの花

菱丸



○梅形咲（うめがたざき）	三品
○吹切咲（ふきぎれざき）	五品
○いさ葉アんごう咲	五品
○遊蜂（ゆうほう）	一品
○いさ葉孔雀咲	七品
○いさ葉猫が家	二品
○霧の笆（きりのまがき）	一品
○越路の月（こしぢのつき）	一品
○朝霞（あさがすみ）	二品
○木立（きだち）	四品
○いさ葉梅形咲	三品
○アんごう咲	七品
○葵葉アんごう咲（あふひば）	一品
○孔雀咲（くじやく）	八品
○賤が家（しづがや）	十品
○いさ葉擬柳丸咲（りゆうまるざき）	六品
○残月（ざんげつ）	一品
○朧月（おぼろづき）	一品
○いさ葉無地丸咲（むぢ）	九品
○木立甚當咲	一品

通計四十種百六十六品

○孔雀咲

葉　あしきふ斜ふふきてゝも常葉より似よる故ありもすじるこれなし

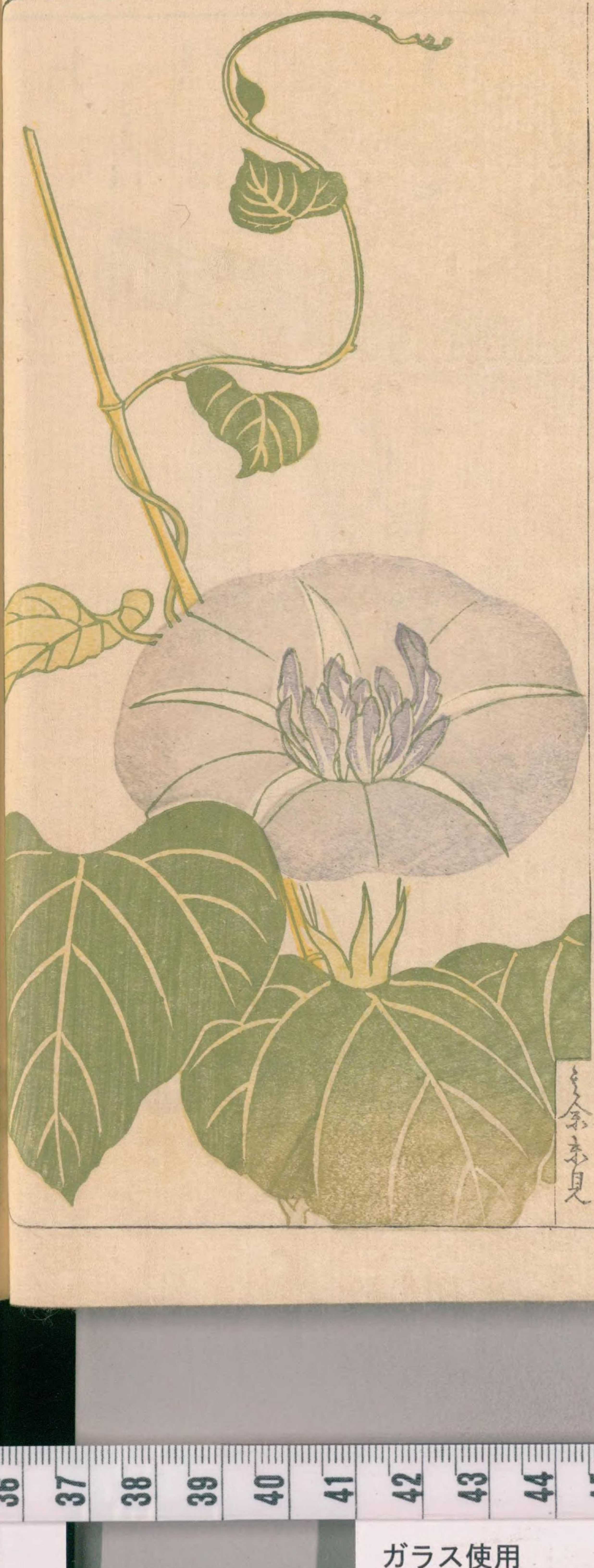
花　丸咲にて白同色の花弁の細くきれしものの出る之多きものは十枚余あき

その内一二枚出る花弁の先をおく(?)いげる縁ら出る出る枚おし此花乃咲

あれなし紫に限る常葉のものあらん又変色の白に出るもの未見

○法花田○るり○浅黄○薄紅○紅○地浅黄標ゑまり○白○地に標志ぼり

其余未見



○大輪

名を花色およびて好者の意に変る作徴之

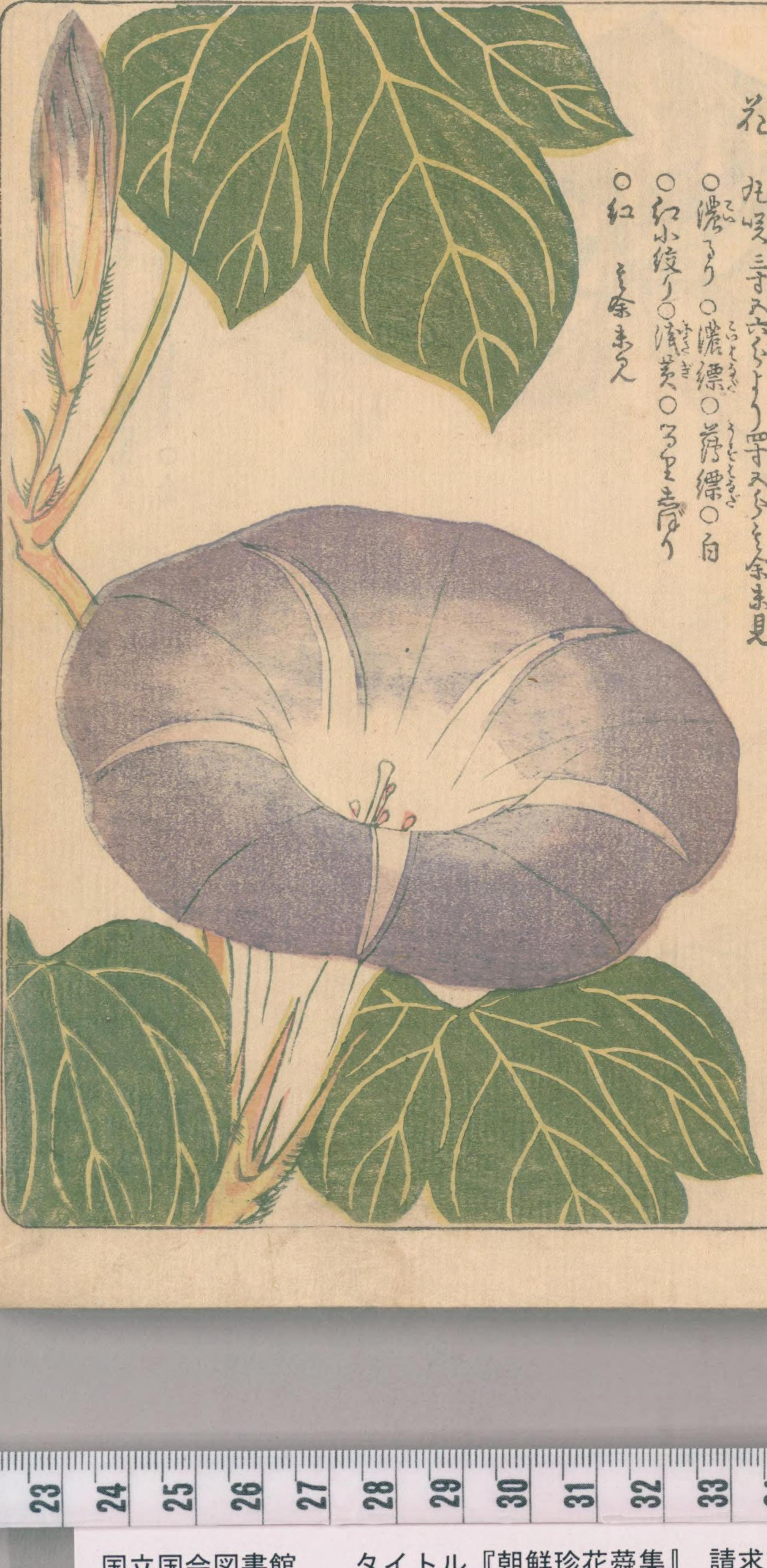
葉　常葉

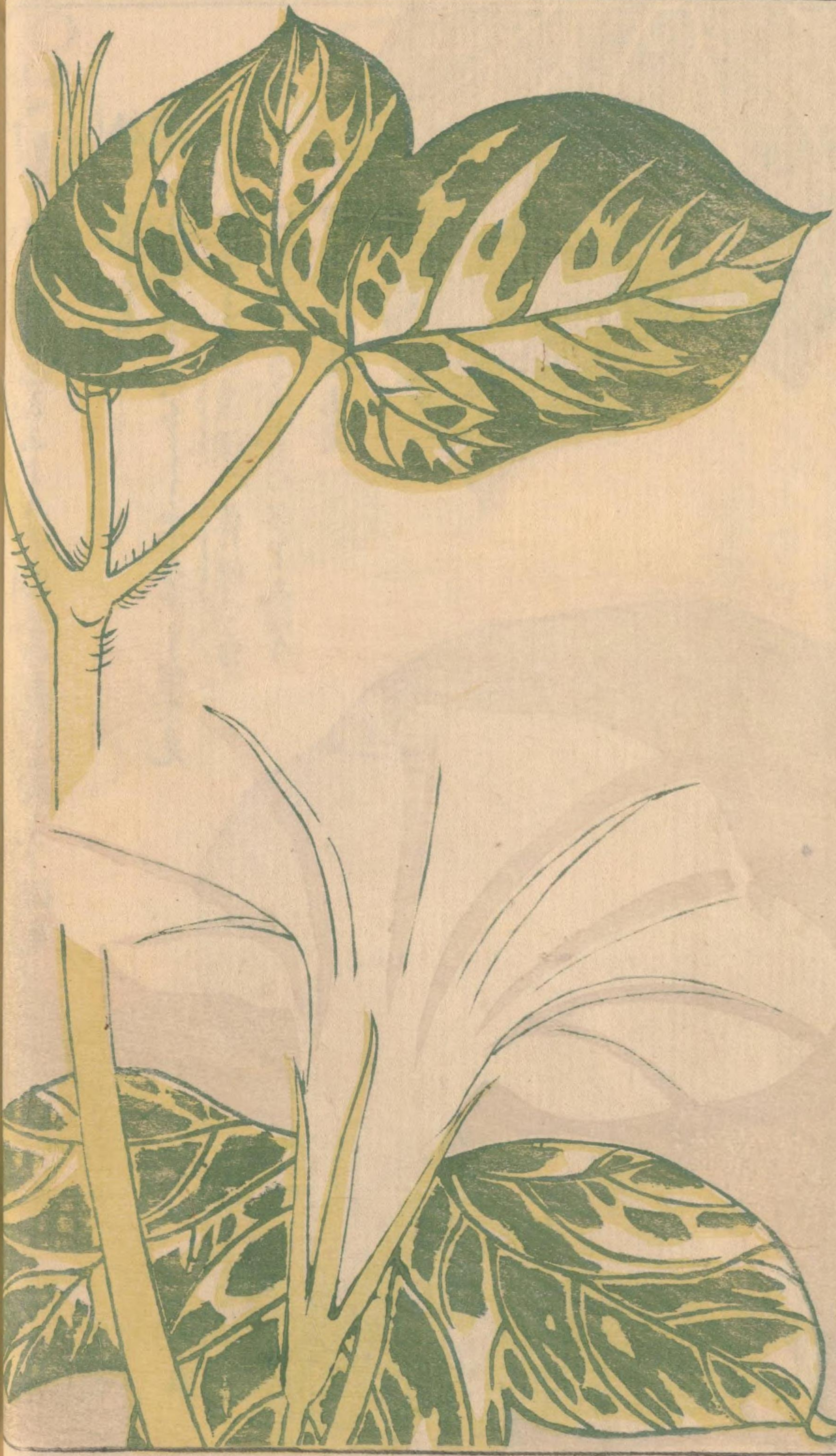
花　丸咲　三寸又六分より四寸又五分を余未見

○濃るり○濃標○薄標○白

○紅小絞り○浅黄○るり大絞り

○紅　其余未見



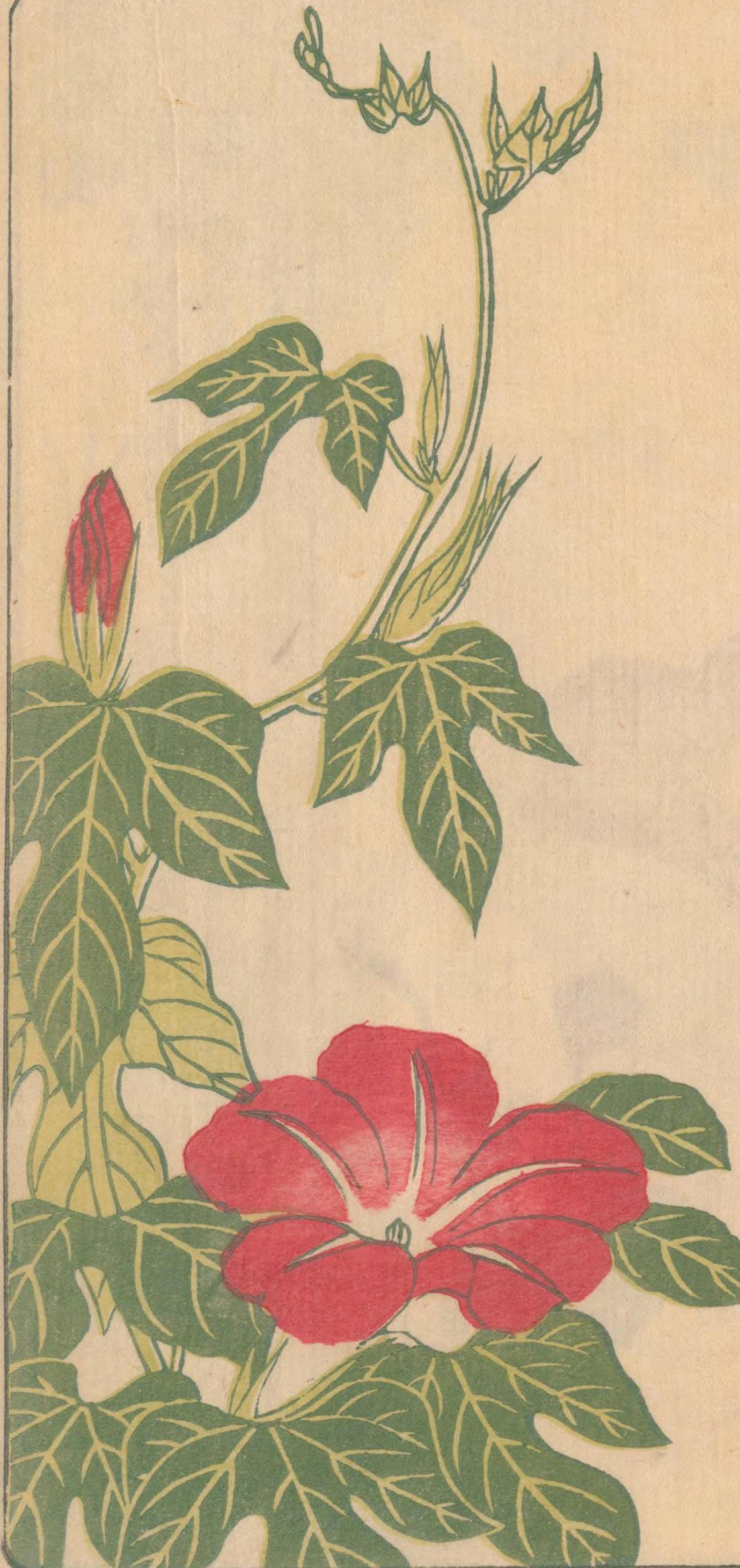


○いさ葉大輪（たいりん）

葉　常葉にしていさ葉あり

花　丸咲大サおよそ多し　○白

え余来ん



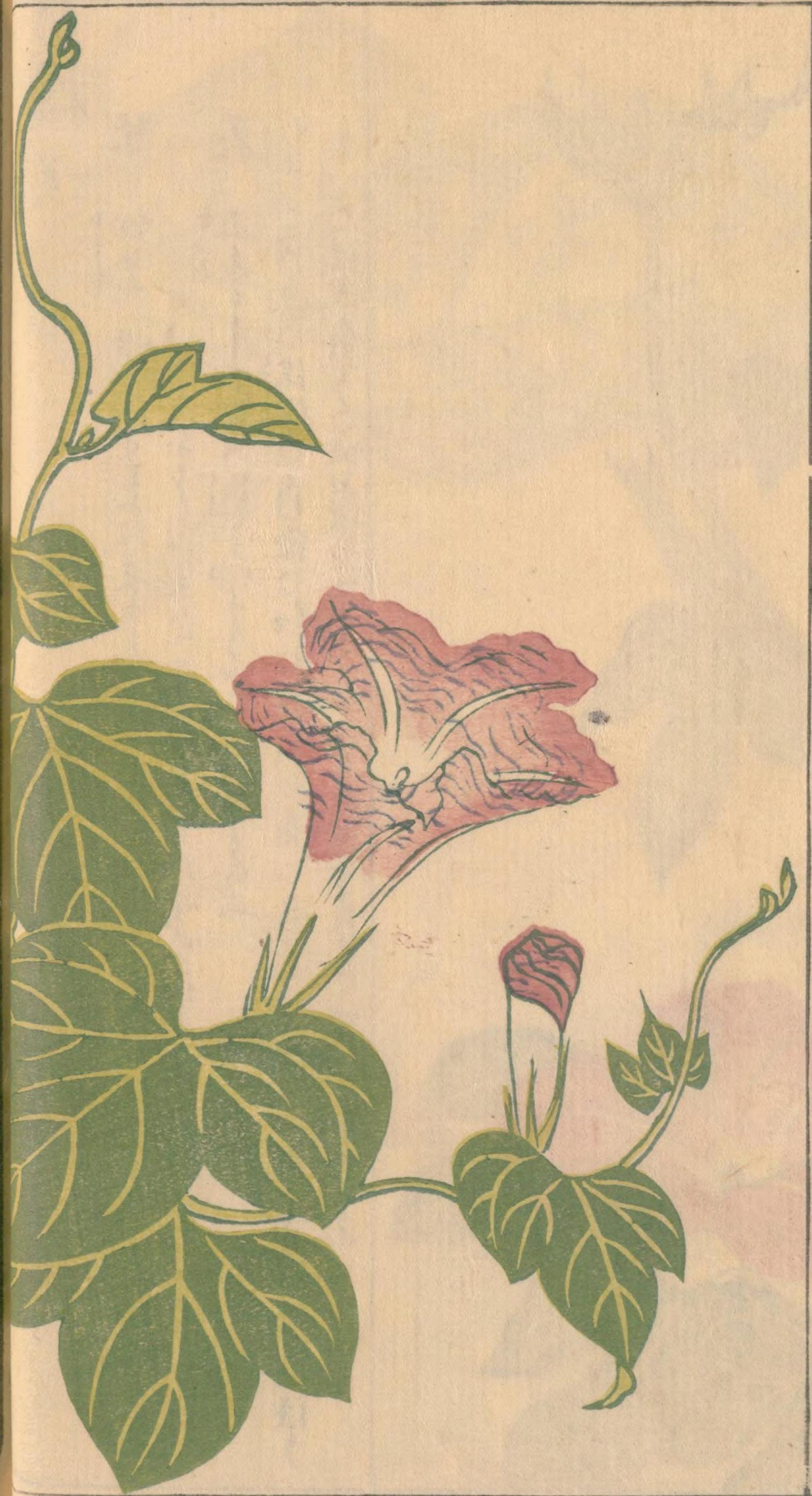
○櫻咲（さくらざき）

葉　細葉（ほそば）　此葉いさ葉にて、これは龍田川の梅とよぶる細葉のやうにそり葉なれ　いさゝかちぢみあり　又はいさ葉にて丸咲の花あり

花　五弁（ごべん）にして桜の形（かたち）に似たりよつて桜咲といふ
○るり○濃縹（こいはなだ）○薄縹○紅○薄柿○白○茶色○浅黄○白地薄柿○紅絞り
○濃縹絞り○地白縹の一筋絞り○地白濃縹の絞り○紫

え余来ん

ガラス使用



○縮咲（ちゞみざき）

葉　常葉あり又細葉にて縮咲のもの未見

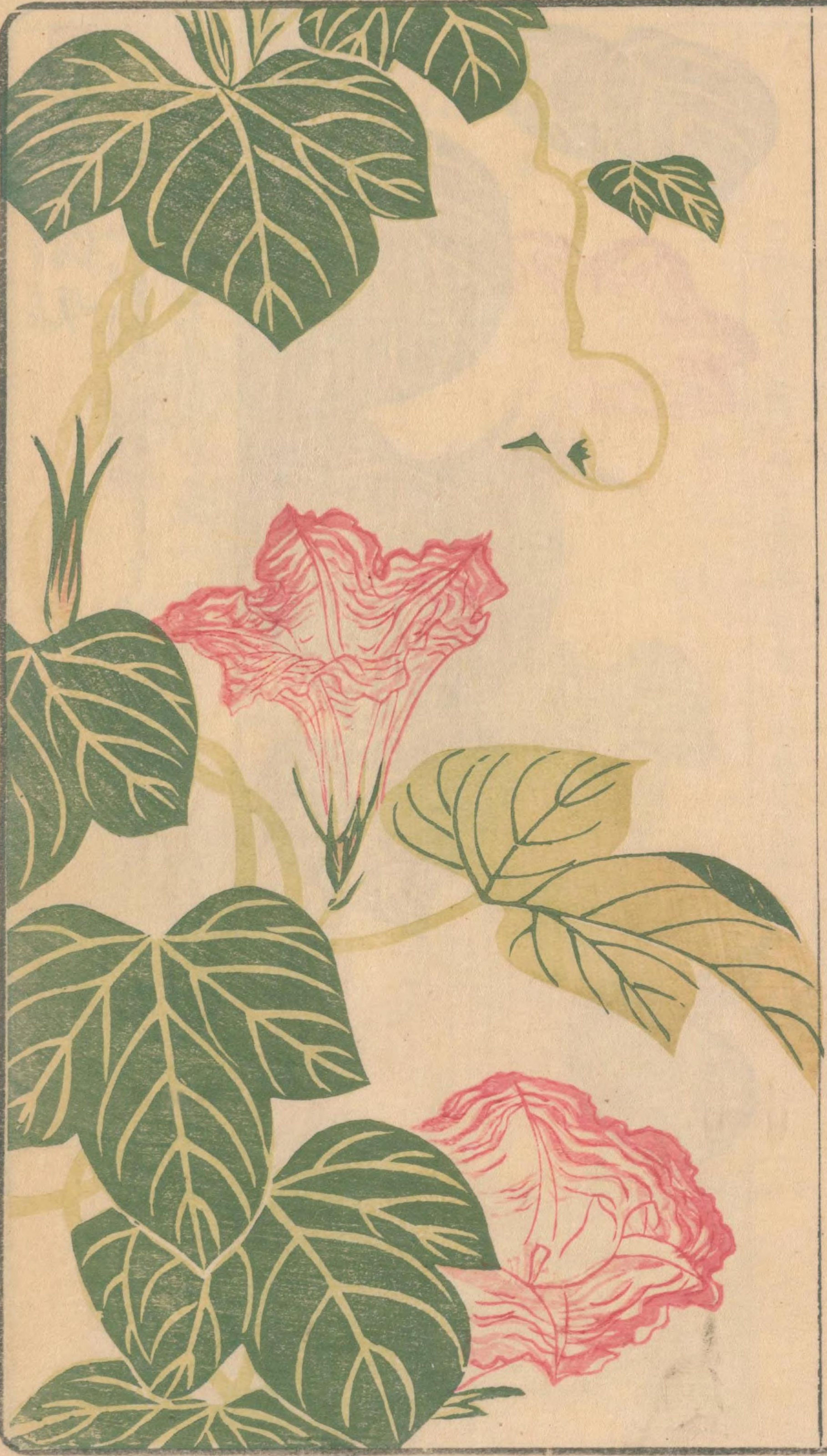
花　同のごとくちゞみて咲之　○紅　○るり　○浅縹　○薄縹　○白　○柿色　○極薄紅

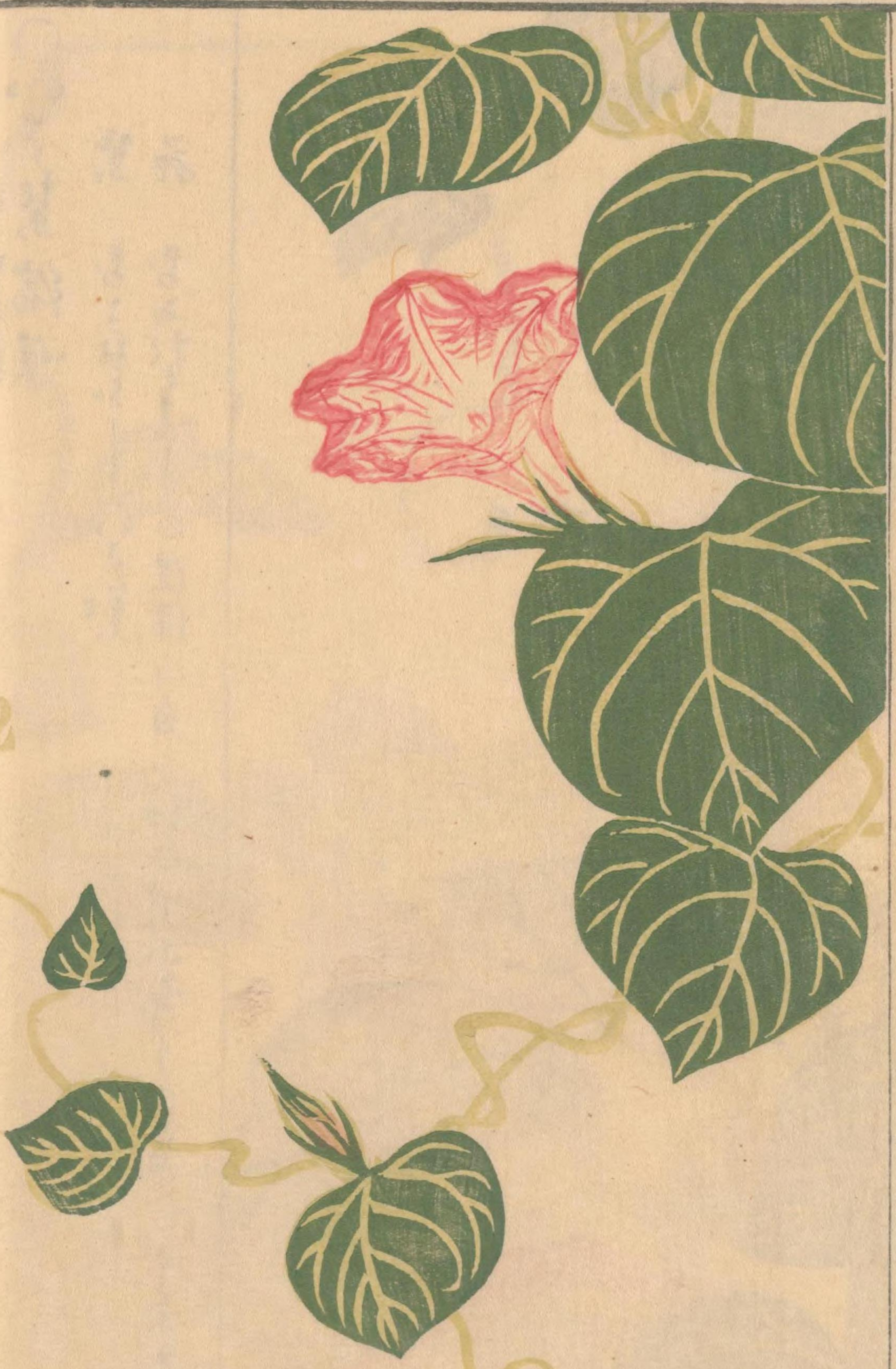
○浅黄　○鼠　○地紅縹一筋覆輪　○縹小しぼり　○紫　○茶色　右余未見

○いさ葉縮咲（ちゞみざき）

葉　おうむもじ　いさ葉

花　おふねすじ　○浅縹　○白　○紅　○紫小しぼり　○鼠　右余未見





○葵葉縮咲（あふひばちゞみざき）

葉　賀茂葵（かもあふひ）の形（かたち）に似たり いさゝかのちゞれ未見

花　おなじ　○嵐○藤標○浅黄○地白標あり　之斎未見

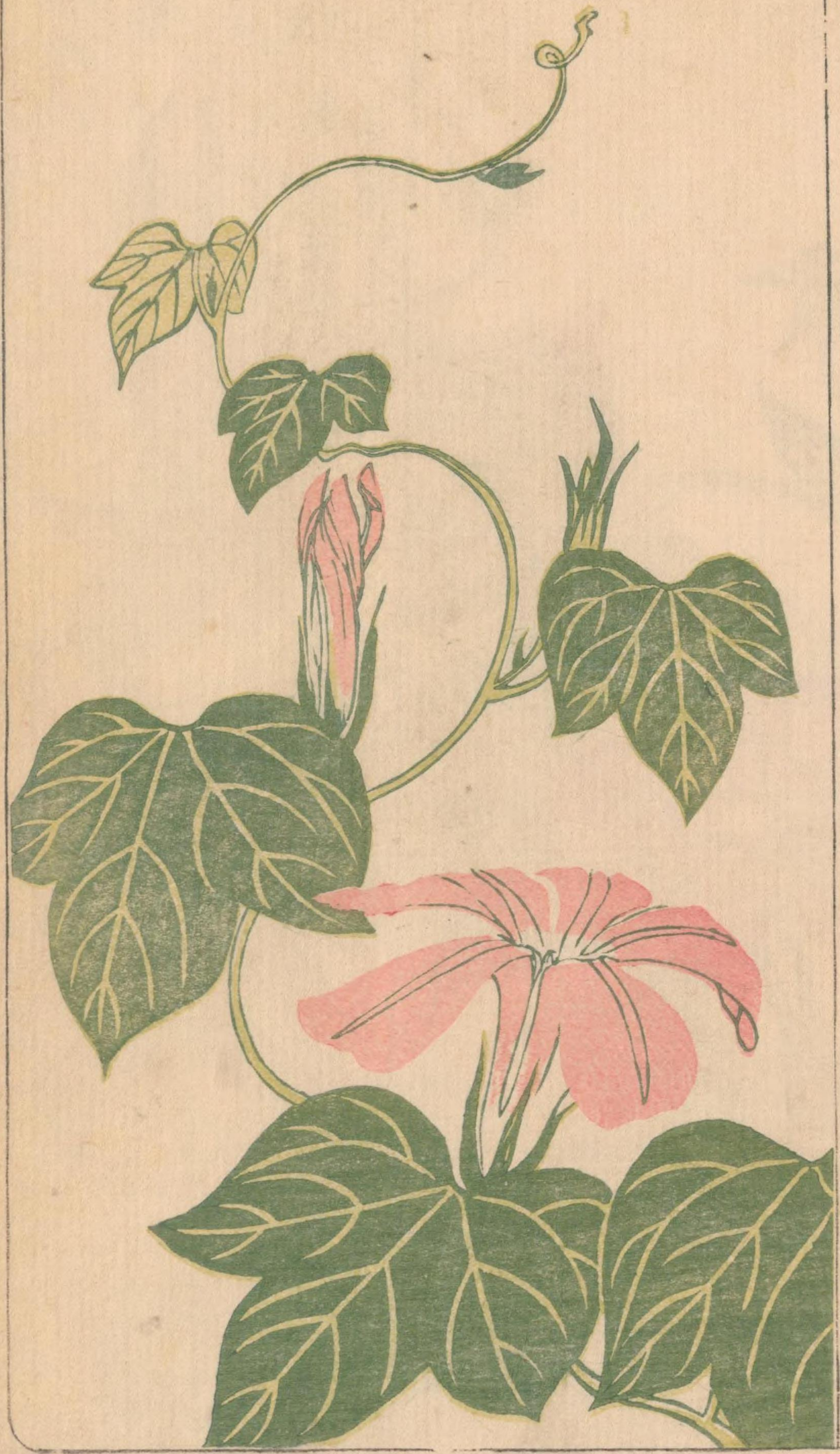
○采咲（ざいざき）

葉　常葉（つねば）いさゝか丸みあり

花　五弁（ごべん）にして桔梗と異（こと）なり丸咲をさき切るがごとくにして采（ざい）のごとく細（こまか）しうつくし

又花のさきより内へまくれたるやうにて巻縮（まきちゞみ）のごとし

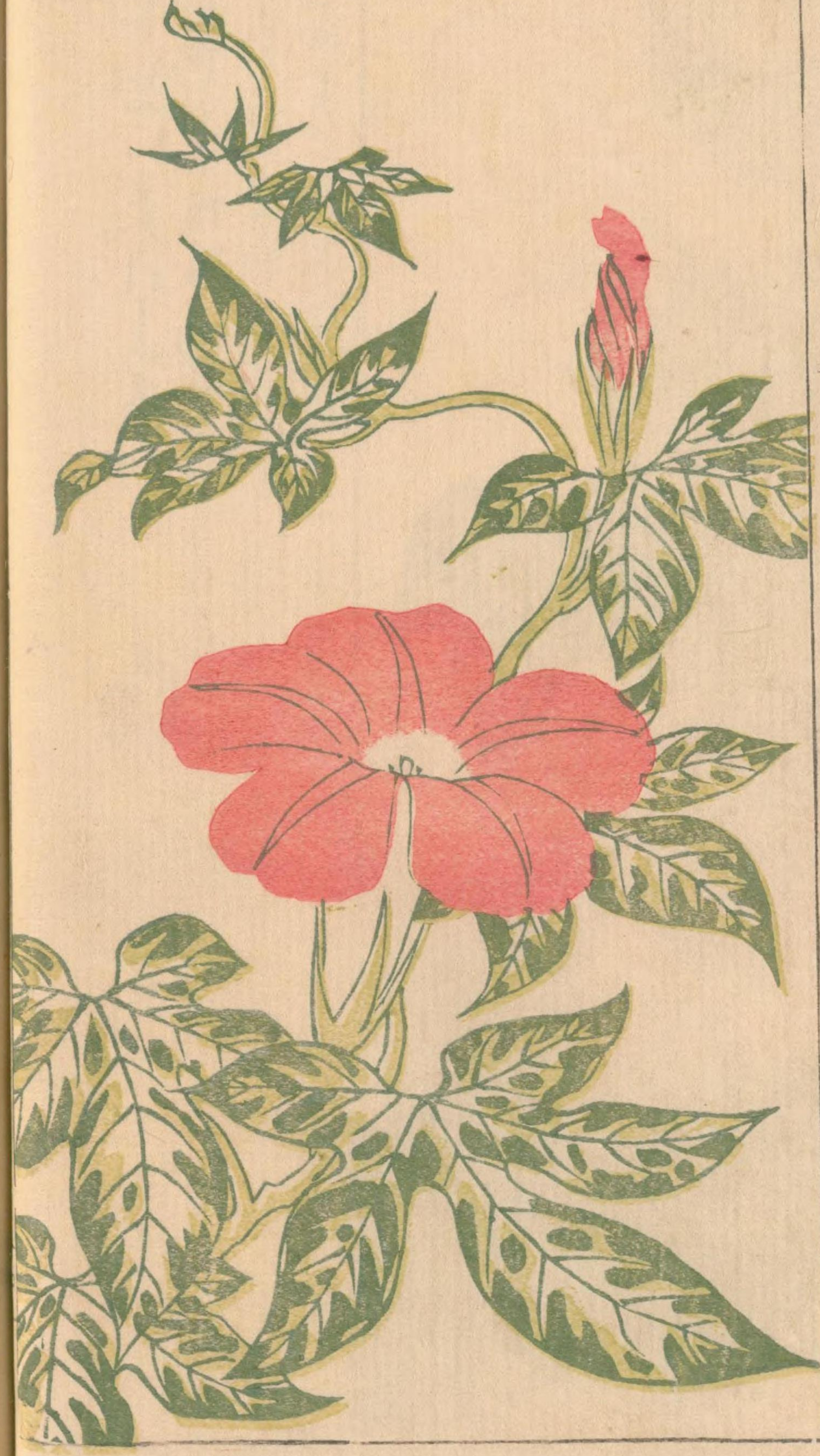
○浅黄○藤色○藤標○白　之斎未見



○龍田川（たつたがは）

紫　いさゝ紫にして爪紫（つまむらさき）のごとく葉に斑（ごふ）あるをそへて細葉のるいにもあらず丸葉にもあらず
かれ葉まじりかのごとく此縁紅に出して又花の葉にもうけ茎（おぎなり）に出て面白（おもしろ）し
実花のとむ此次（つぎ）図（づ）次又此紫に枝の中（なか）ばよりして細く柳の葉にも似たる形の出るなり
花　桔梗　○濃縹○薄縹○るり○浅黄○紅　○白○紫○藍鼠黄縹置入
○瑠璃縹かぎり　其余あらん

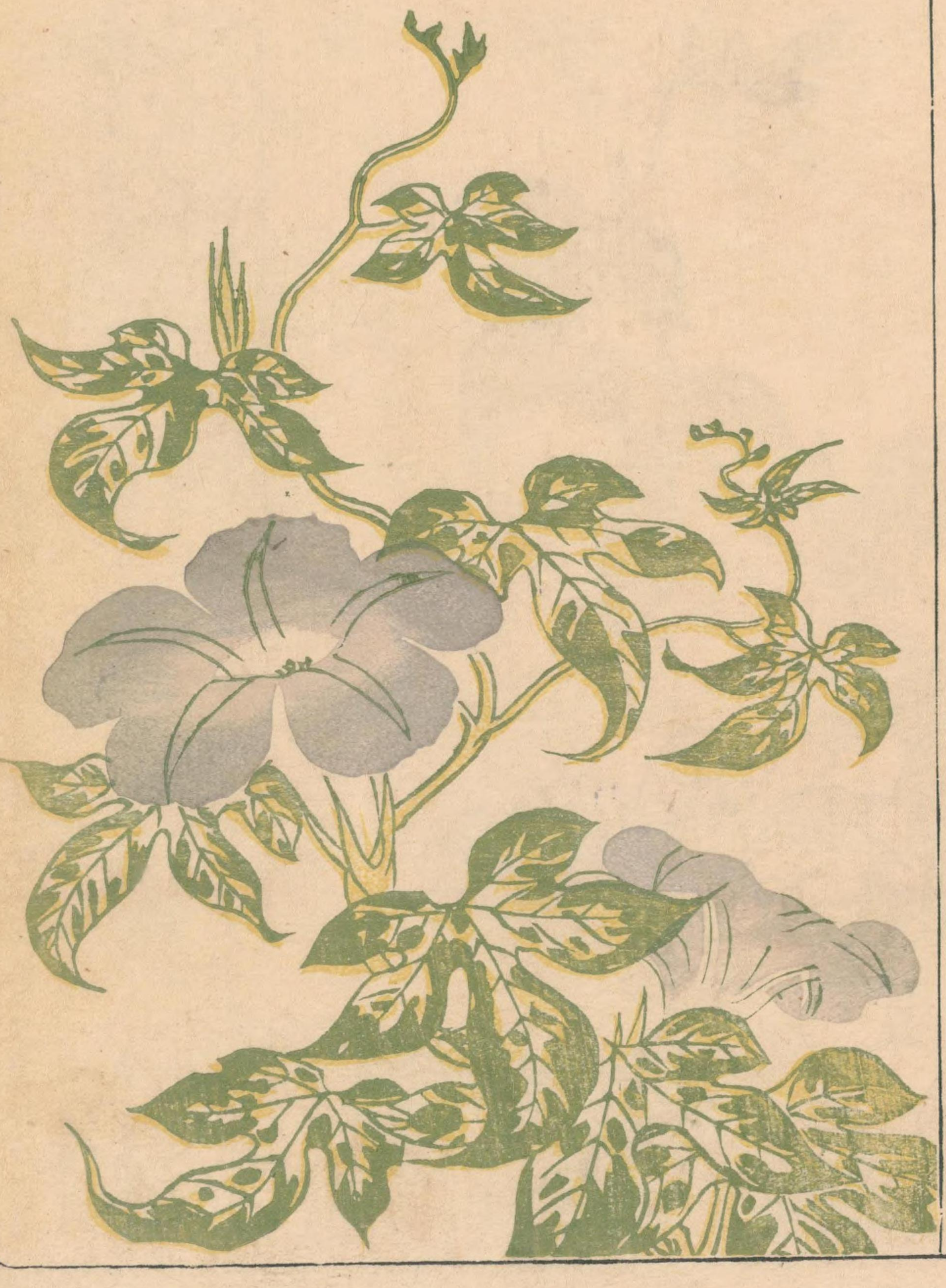
余（よ）名は此るは葉に花龍田のもみぢに似たりとて名づく



○野分（のわき）

これ龍田川の条（すぢ）より出る葉の実花（みざき）はかゝるなき図（づ）次

余名ばくる所葉花野（の）わきの風に吹（ふか）れたるさまなるによりて名ばく



19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53

国立国会図書館　タイトル『朝鮮珍花蕣集』　請求記号 214-3

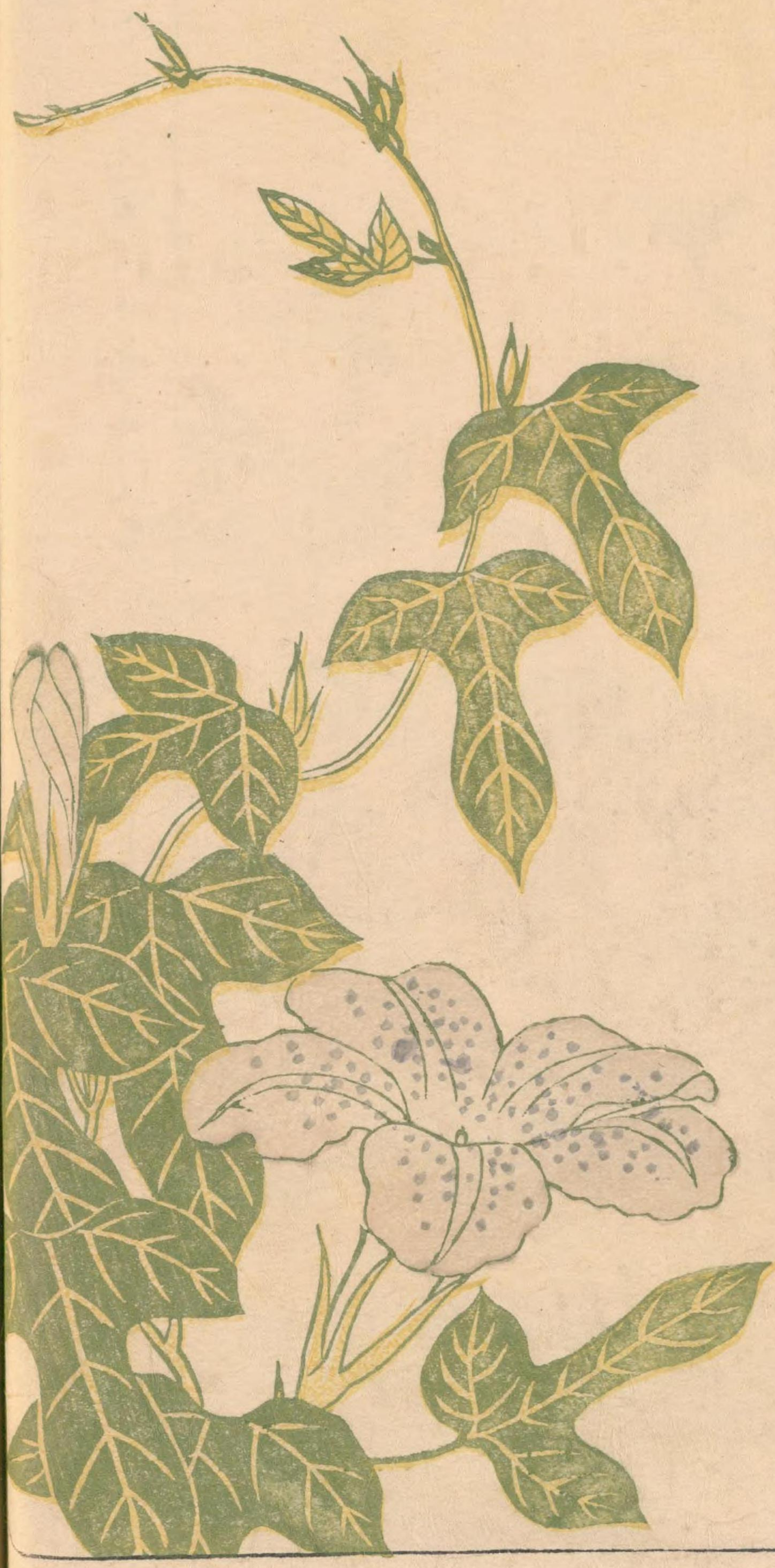
ガラス使用

○雲井（くもゐ）

葉　細葉にしておし是（こ）は葉にも杖の葉（ちう）ばかりにして細く柳の葉に似寄るものなる
なり隈（のし）よりは細葉の形もなくすかくれども

花　桜咲きにれてこおし添し吹切（さききり）を咲と異（こと）なり○地浅黄にて星入　三余書之

余名づくるにこれを一本の井につるべのごとくさげて
[illegible]のさまに似るによりて名づく

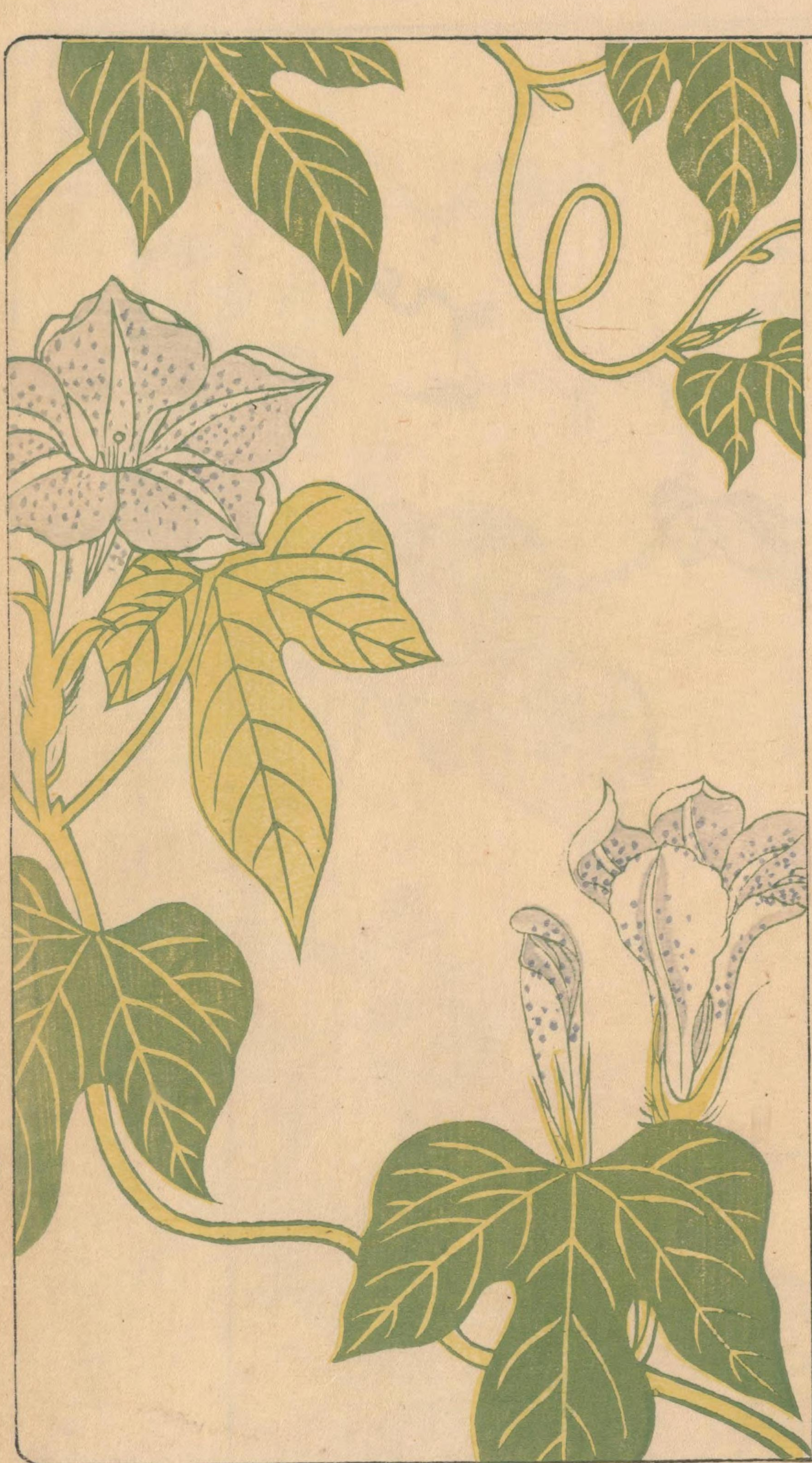


○乙女（をとめ）

葉　細葉なりいさゝかそれその表見

花　五弁にして先き尖（とが）り吹切（ふきぎり）のごとく筋（すぢ）につきれしてそ花形しなしなとして
○地白藤色ぼかし深山（くえ）にしてうすし又白なり　三余書之

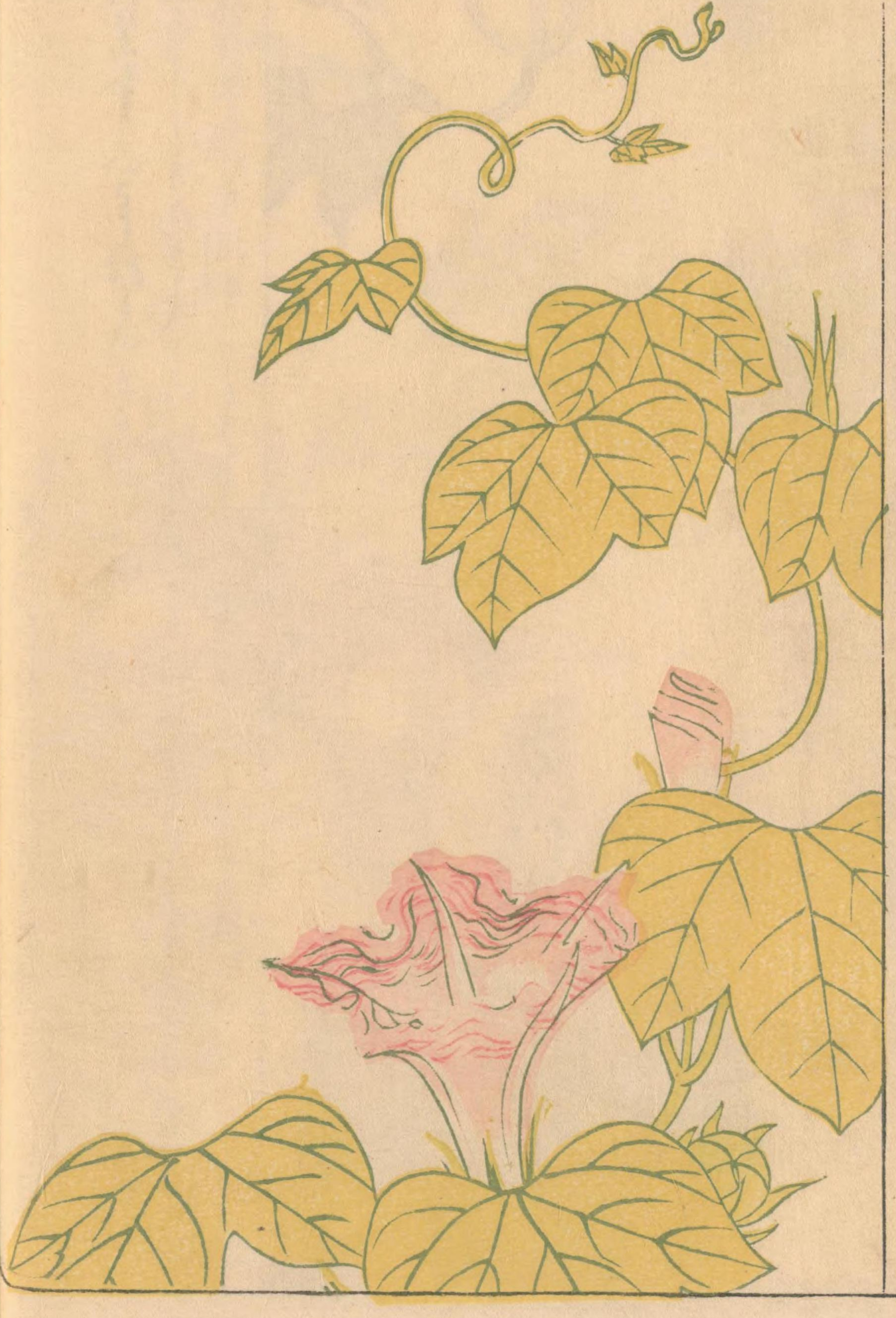
余名づくる所は花形乙女（をとめ）もいつべきによりて名づく



○黄紫（きむらさき）

葉　常葉なりしかも黄色なり　いさゝ葉のもれ未見

花　縮咲（ちゞみざき）○蕣也　之余未見

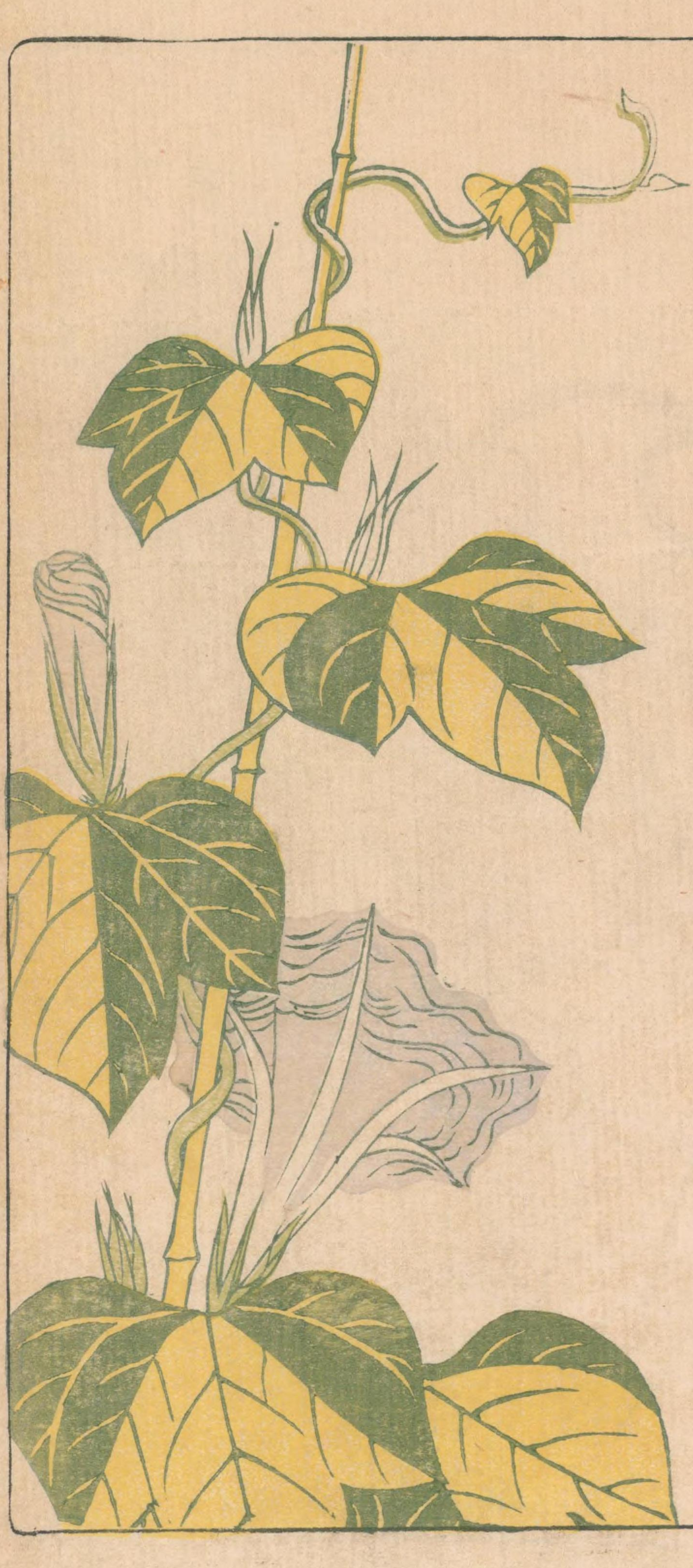


○染分黄紫（そめわけきむらさき）

葉　常葉なりしかも黄（き）と常の色（いろ）と一まいづゝ段（だん）がハりになり出る又一枚（まい）の葉なかばより深きもあり黄（き）なしく常色の斑（まだら）入もあり色々まじりて出る葉いくつにても同じ

いさゝそれその未見

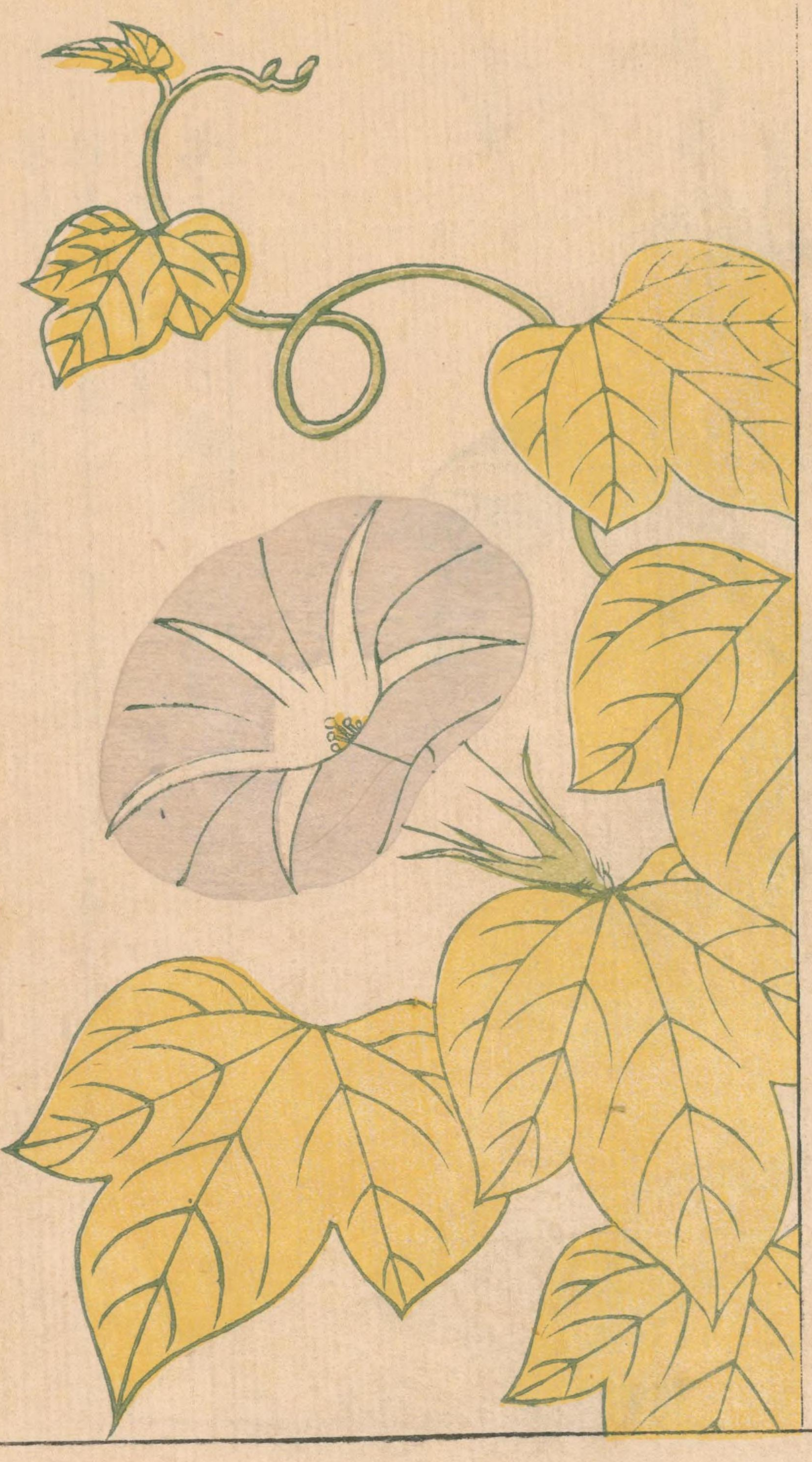
花　前より花なし○蕣也　之余未見



○丸咲黄葉（まるざききば）

葉　あをみなし　深くろのごとく又いさゝかのごとく未見

花　丸咲○薄紫○浅黄　ともに未見

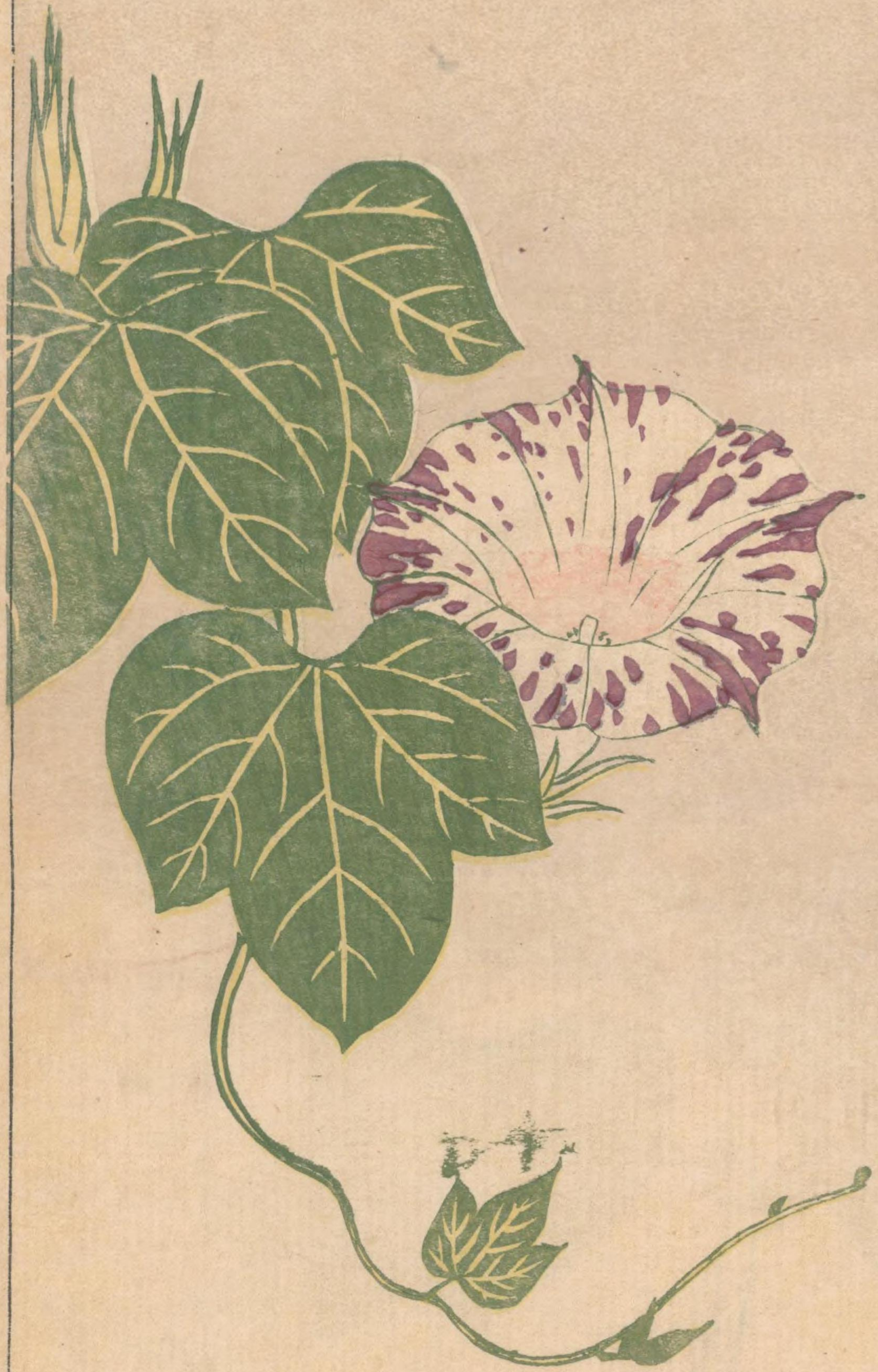


○針末咲（はりさきざき）俗に針かくしといふ

葉　常の葉にあり　いさゝ葉のごとく未見

花　丸咲にしてその五所（いつところ）に皺（しわ）のごときとがり出るもの也

○地に薄縹あり○薄縹　ともに未見



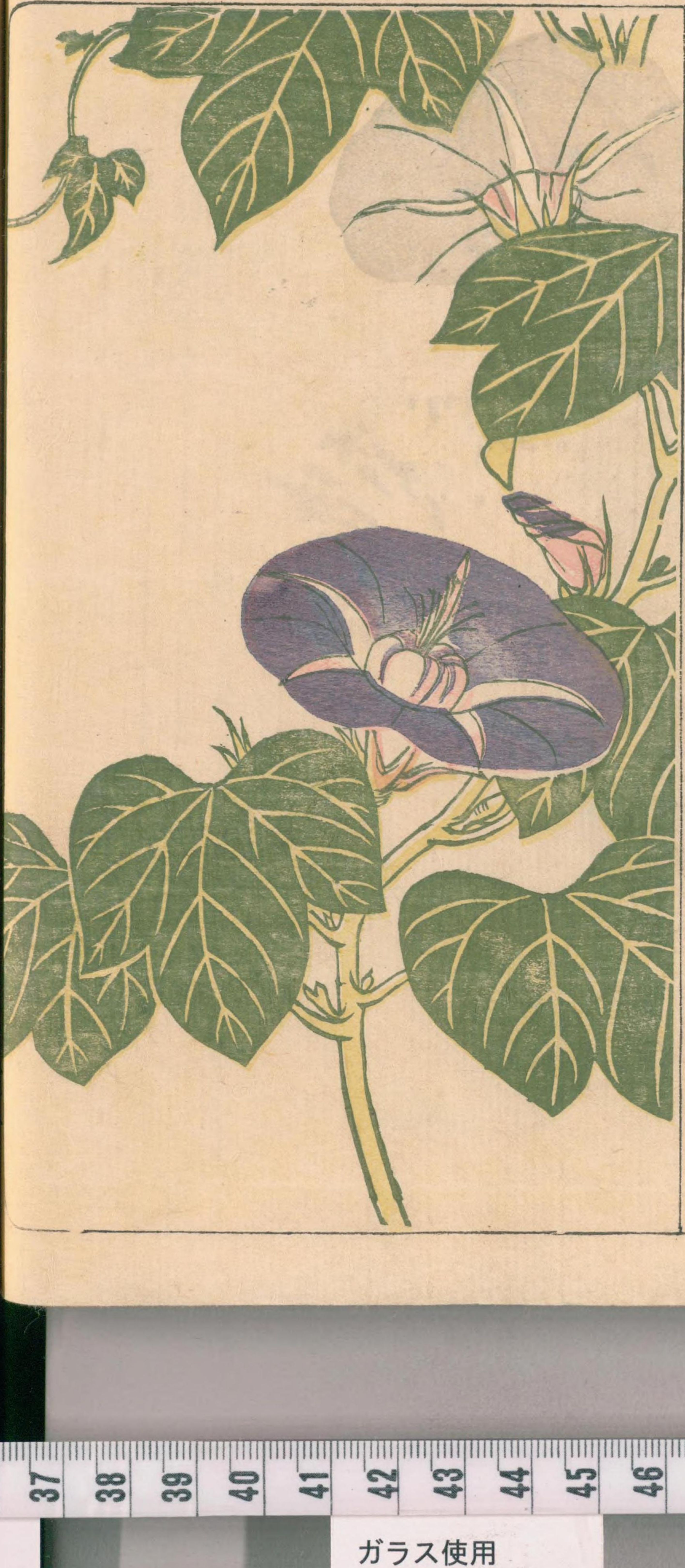
○臺咲（だいざき）俗に茶臺（ちやだい）といふ

葉 常葉

花 丸咲にして臺（だい）あるゆゑ臺咲（ざき）ゆゑに廣（かど）咲なくば臺（ざき）といふ ○るり○縹○淺黄

○紅○白○白底紅○地紫縹しぼり○地藍白のしぼり

三余未見

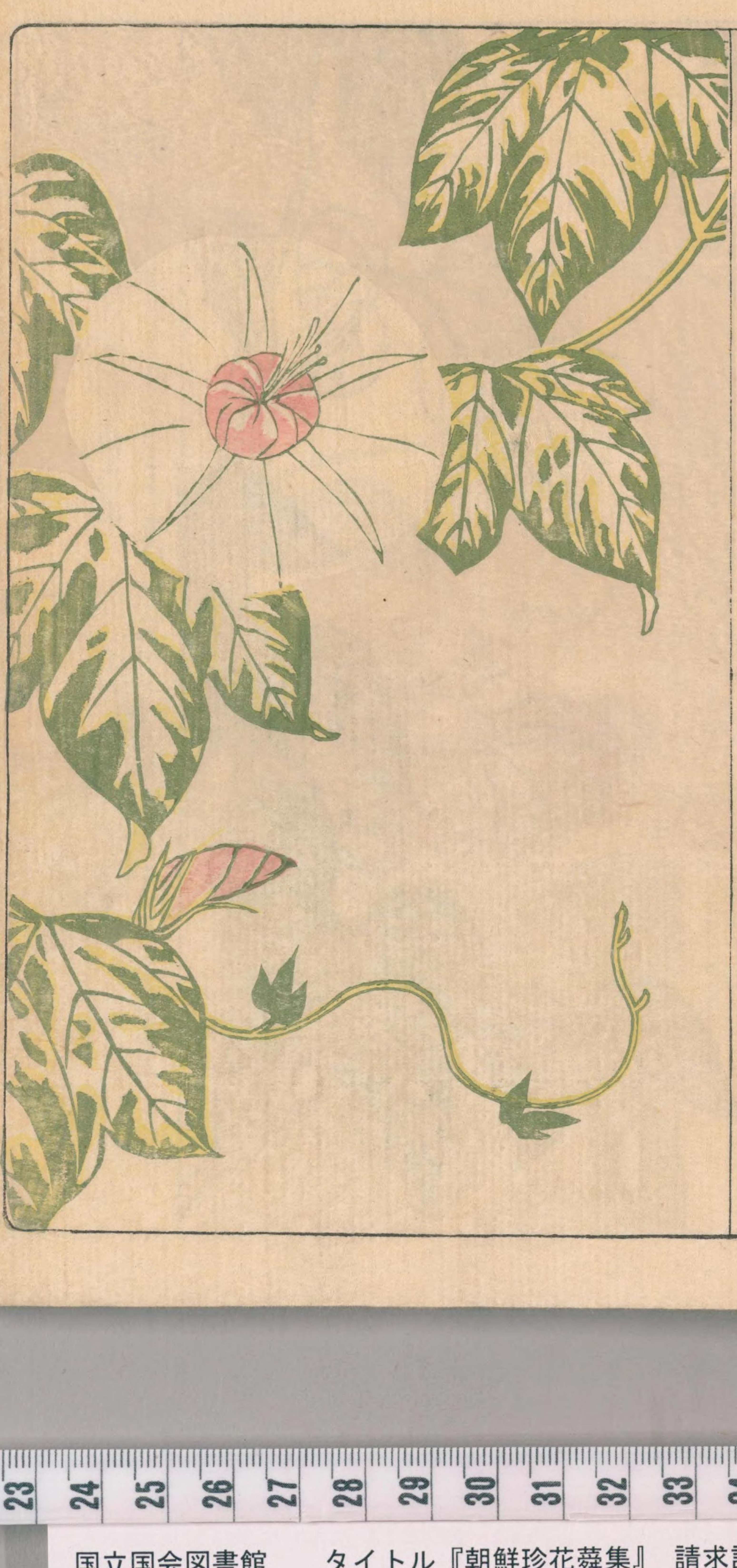


○いろ紫臺咲（だいざき）

葉 あをきまだらじいろ紫

花 あをきおなじ ○るり○藤色○白底紅

三余未見

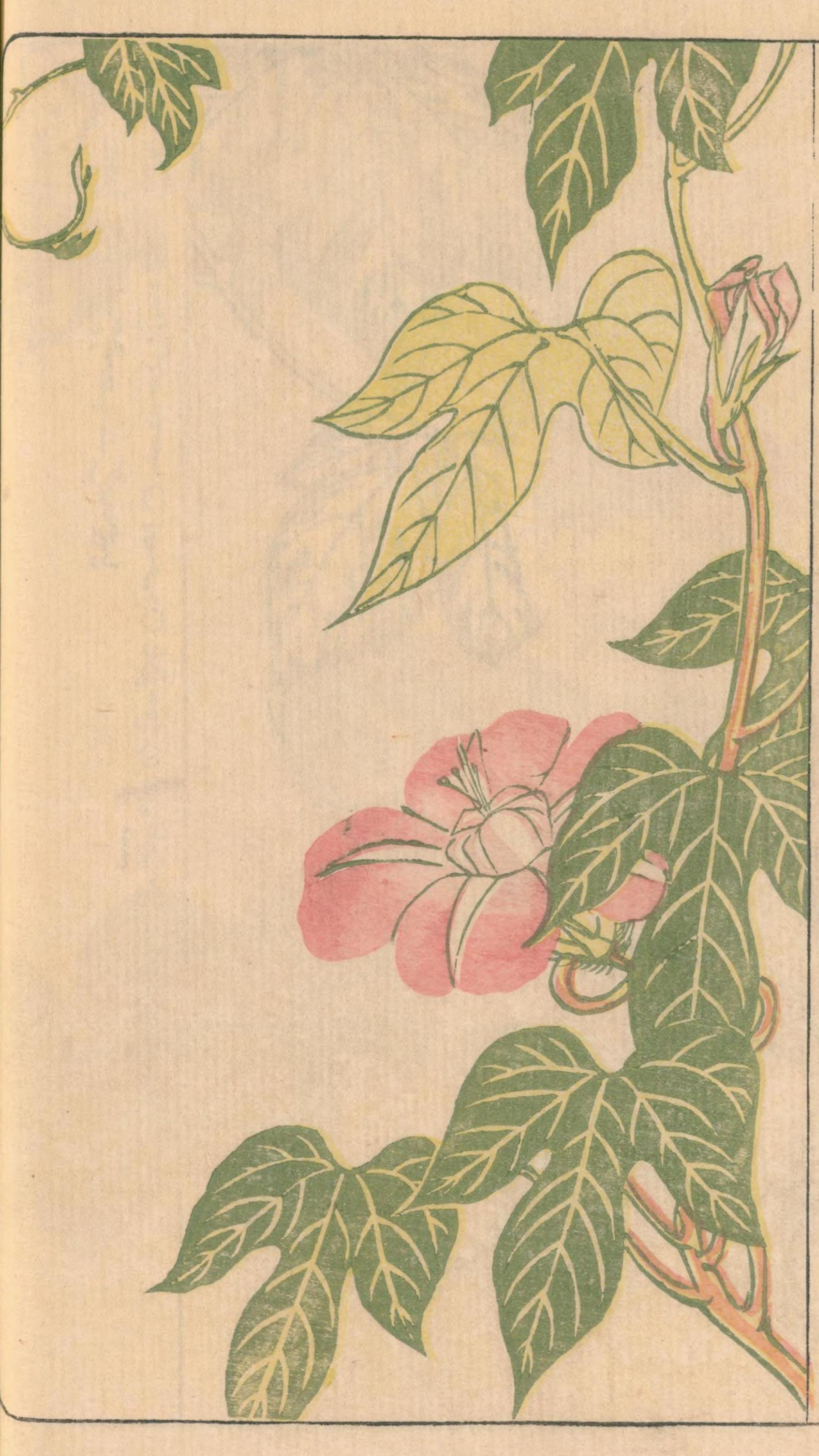


○桜蕣咲（さくらざいざき）

葉　細葉（かきそて）いさしれとの事ん

花　桜咲としる赤ちなど○藤丸○縹○地浅黄縹かとり入

三条未ろん



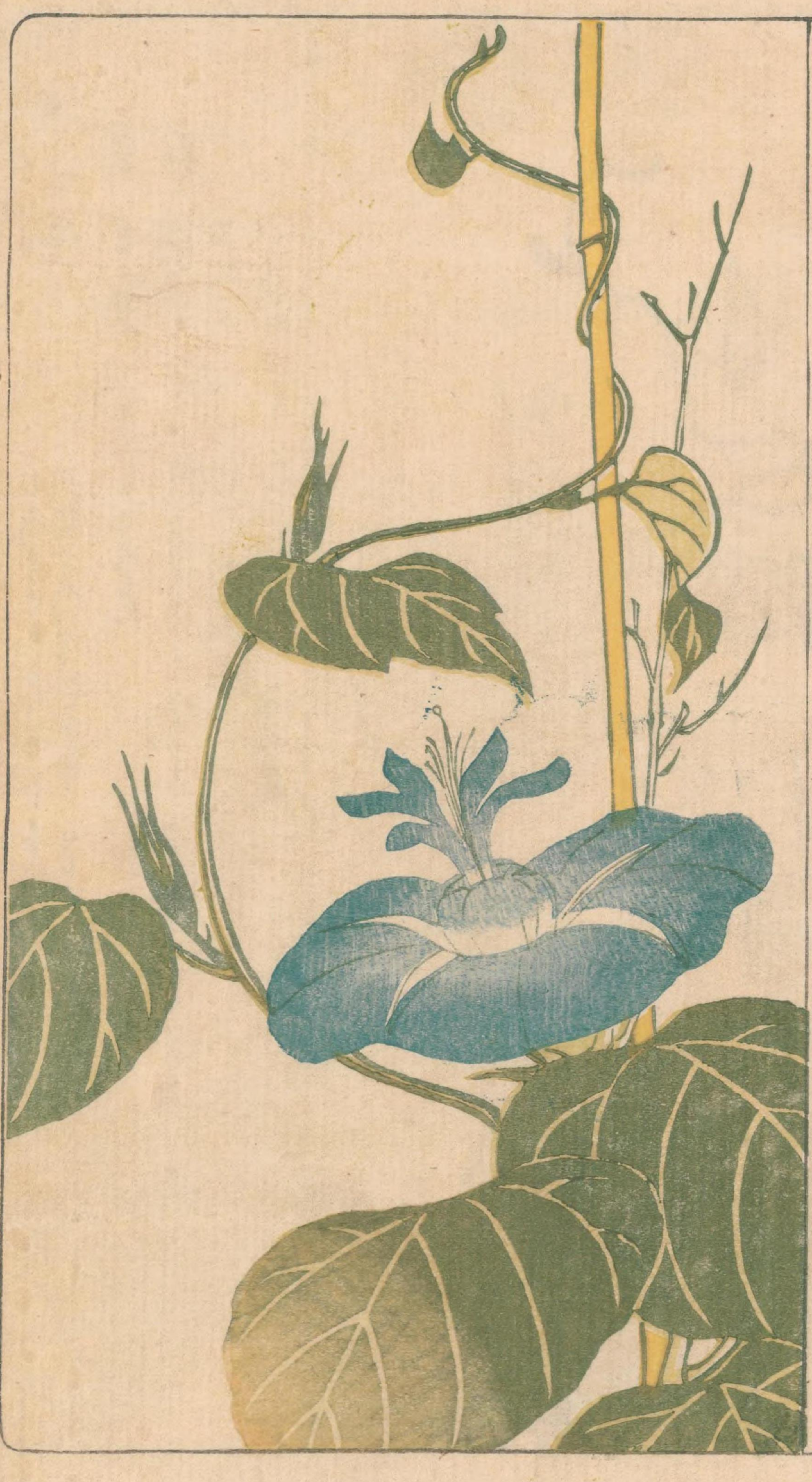
○孔雀蕣咲（くじやくざいざき）

葉　葵葉（あふひば）のおし細くもとゝみえこれをたしをいも紫ぶくらふいさしれとの事ん

きくのちと葉紫よ似るものもあしる

花　孔雀咲（くじやくざき）としるみ色をそて咲（さく）○濃紫白○白座丸

三条来見



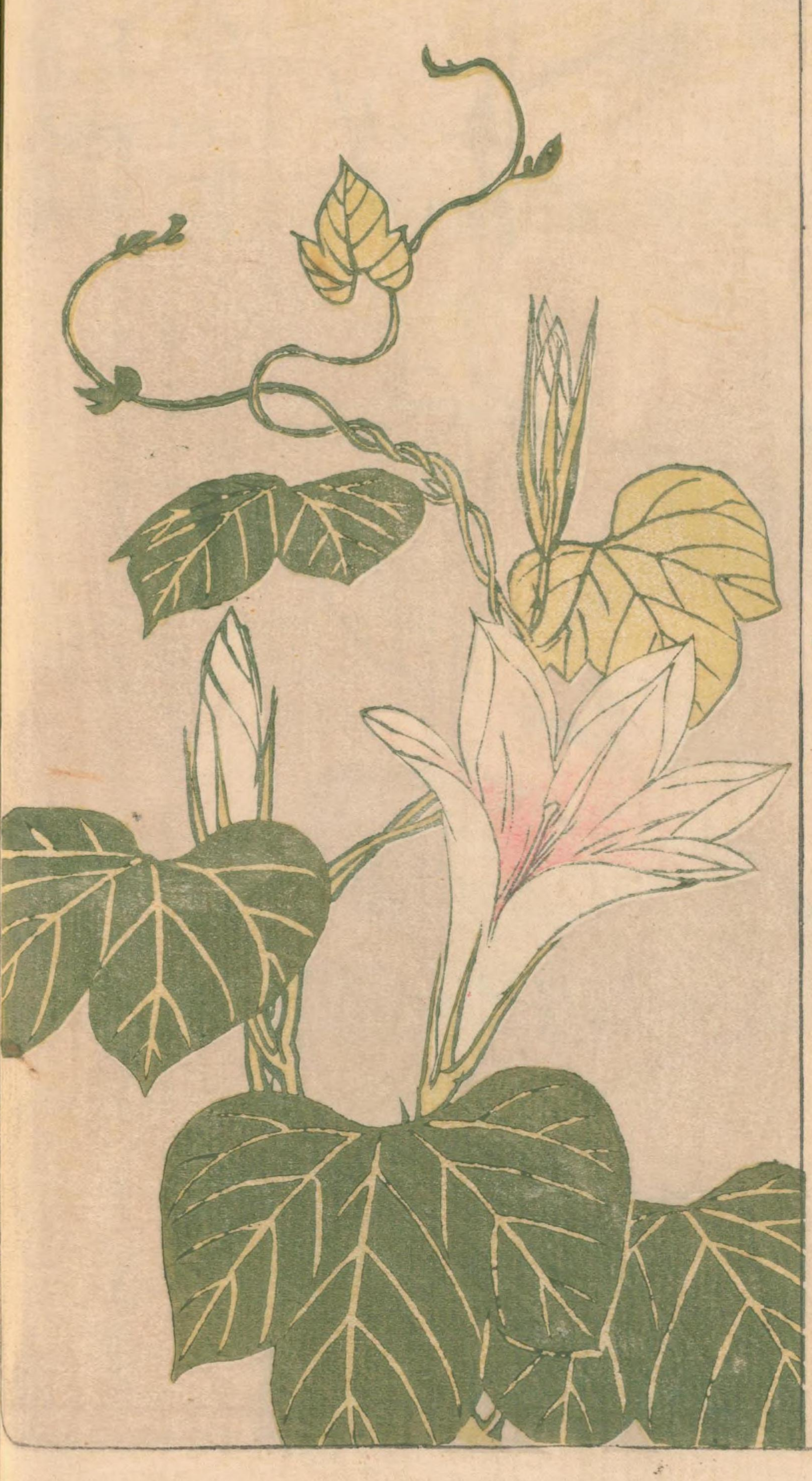
○五手舟（いつてぶね）

葉　常葉にいさゝか斑の条見

花　五弁（ごべん）にして其細く長くして弁毎（べんご）に肉へうく直（すぐ）にして花形（くわぎやう）潔（いさぎ）よし
まんじう咲（ざき）桔梗（ききやう）咲（ざき）花のるいより一段よし

○藤紅　○白　○ゑ鹿紅　右余未見

余名づくる所花弁と舟によく似てかくいへる據（よりどころ）を世に集よりて人しるべ
されど是ればかりにてきゆくみるまゝかゝる名を記して志るさん

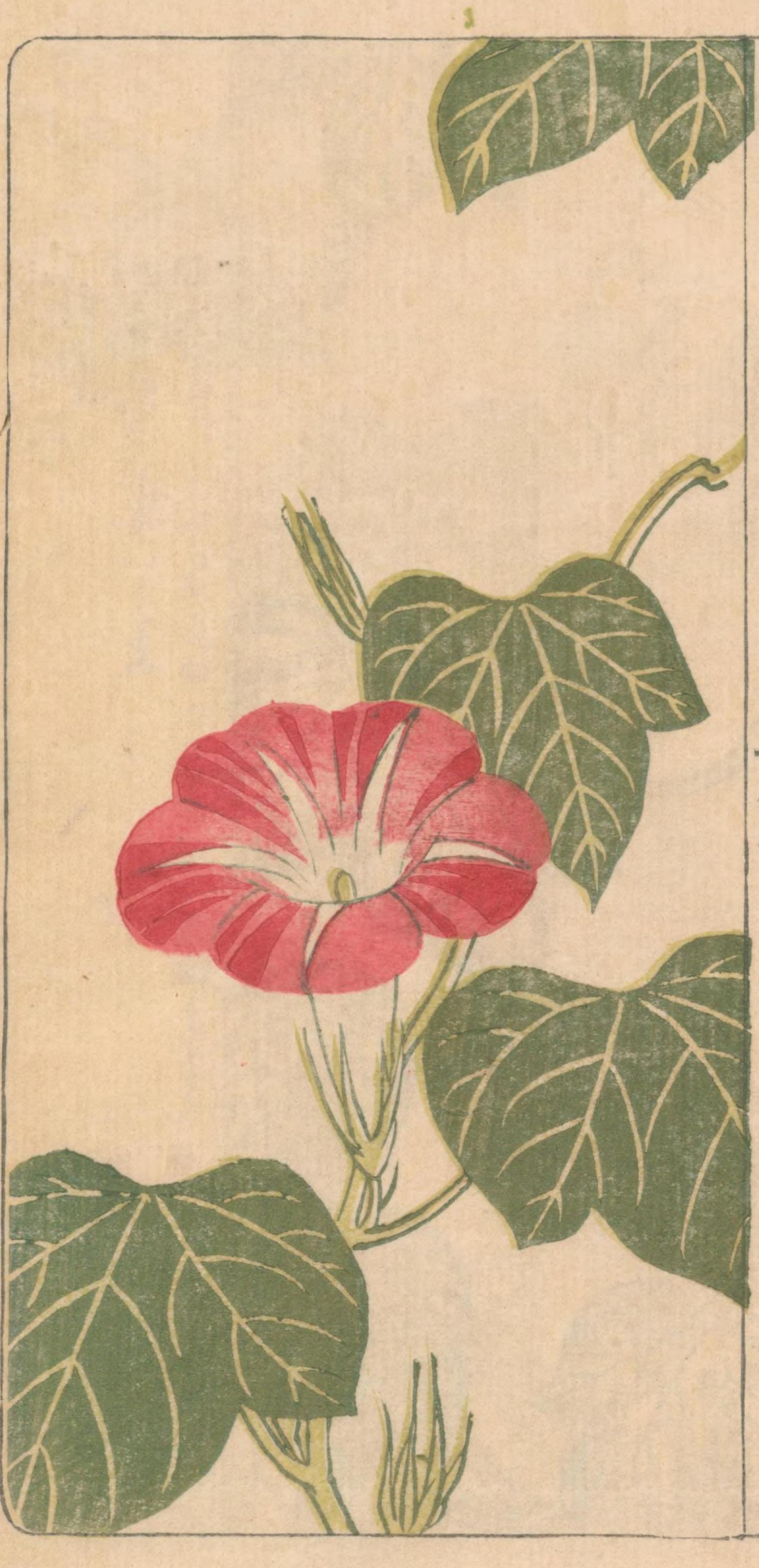


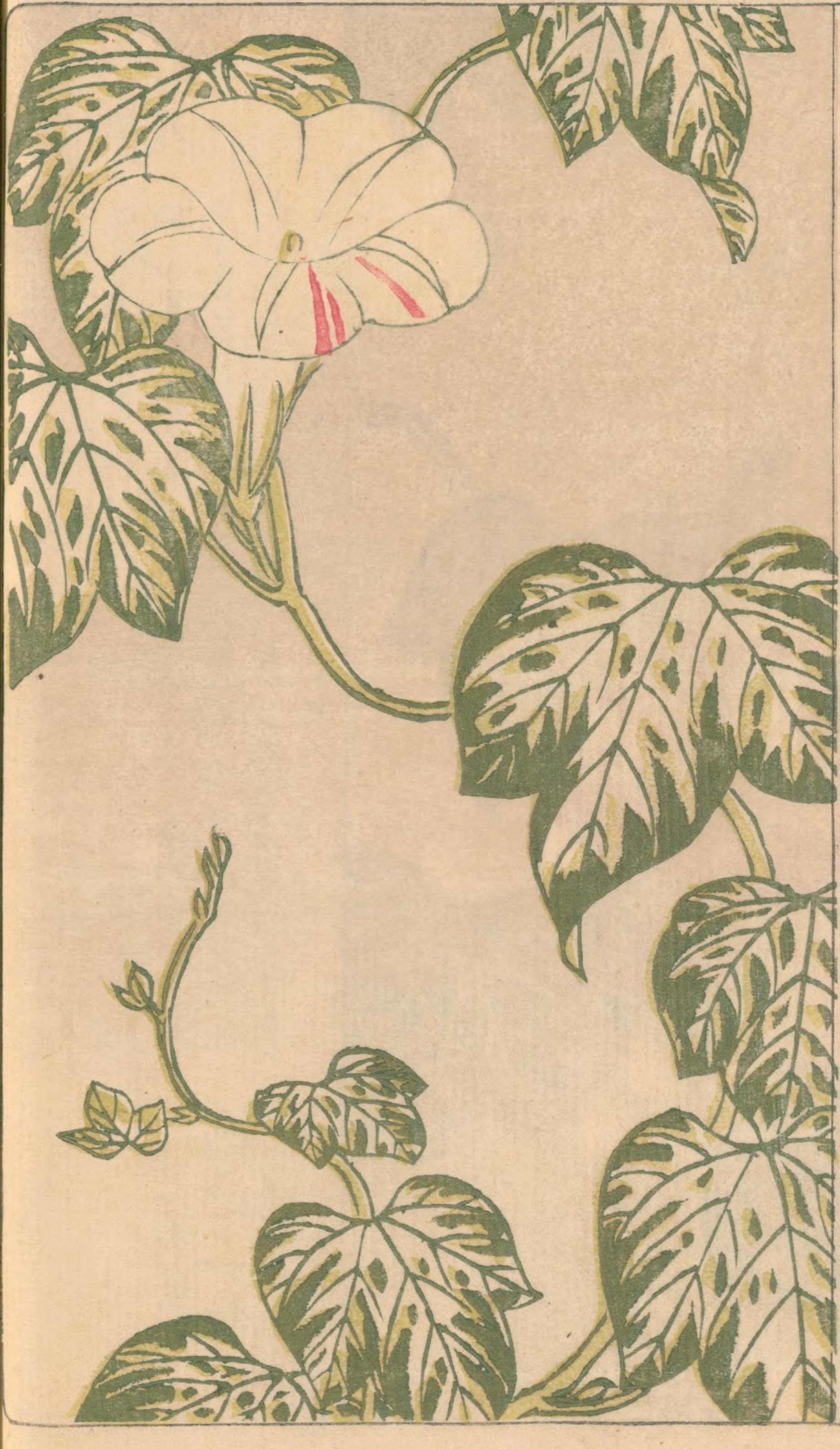
○梅弁咲（うめべんざき）

葉　常葉なり

花　梅花（ばいくわ）の形（かたち）に似てまるし切まてこえをまろくして地纐（きうらくべん）弁に縦（たて）にみぞしく
其（その）まゝに筋（すぢ）ありゆゑにそのちぢみ形花色（くわしよく）ふよりまする色濃（こ）くえゆゑくして花田
紅あり自然（しぜん）と花を捲（とす）程にりてよろし白又茶（ちや）ありまた筋（すぢ）をちかゝるものゝ

○白　○紅　○縹小茶ぼり　右余未見ん



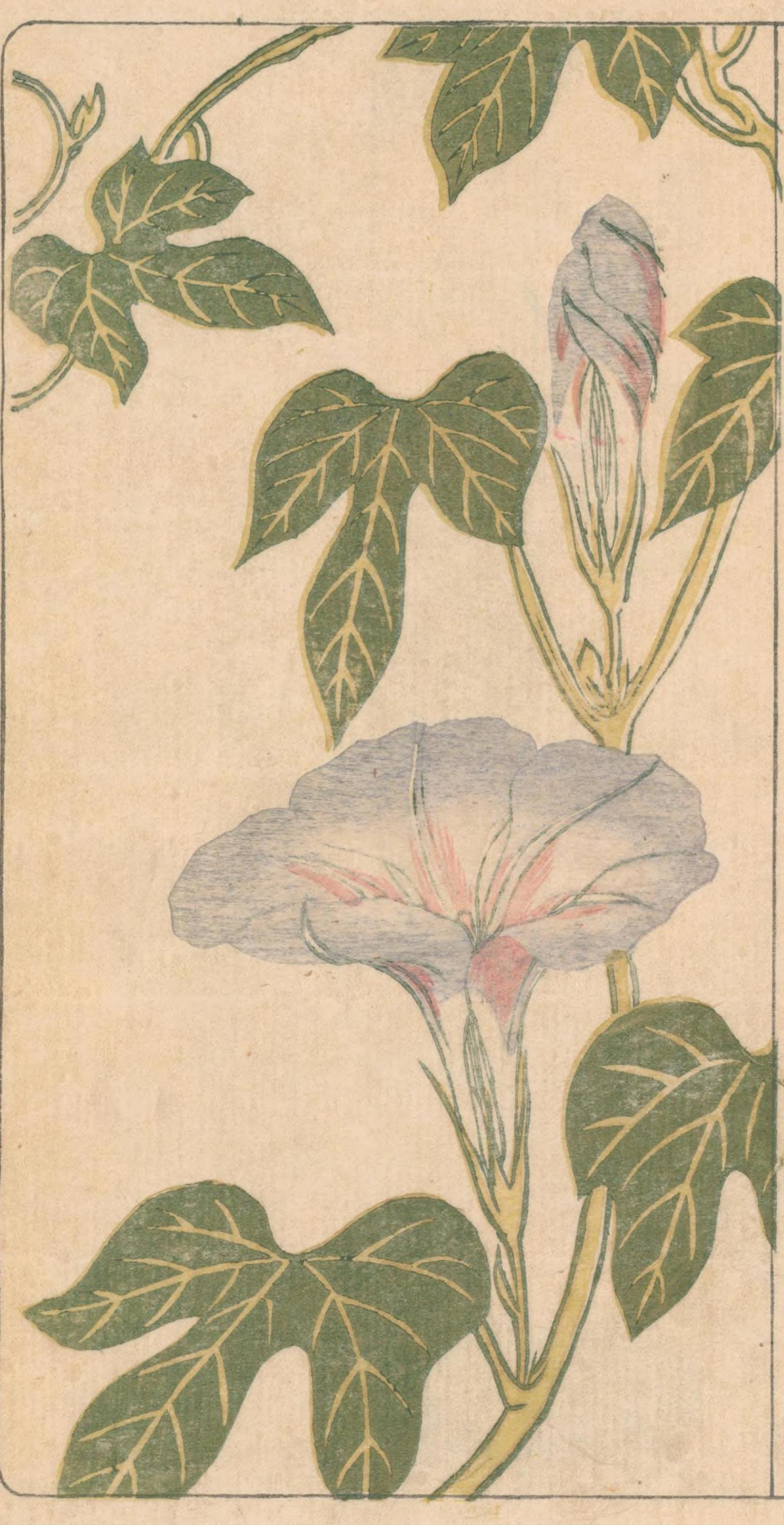


○いさ紫梅笠咲

葉 常葉にしていさ葉

花 いさ紫なりし ○藤ふ田 ○白 ○地白縹細かすり

文象来見



○吹切咲

葉 細葉よりおし細くもしいさ葉のよし来見

花 五弁にしてう先廣くもと細くしてう筒ふとく捩迄きれてむあり

むつくりとしてふきまれず

○白 ○嵐 ○藤花田 ○紅しぼり ○白底紅

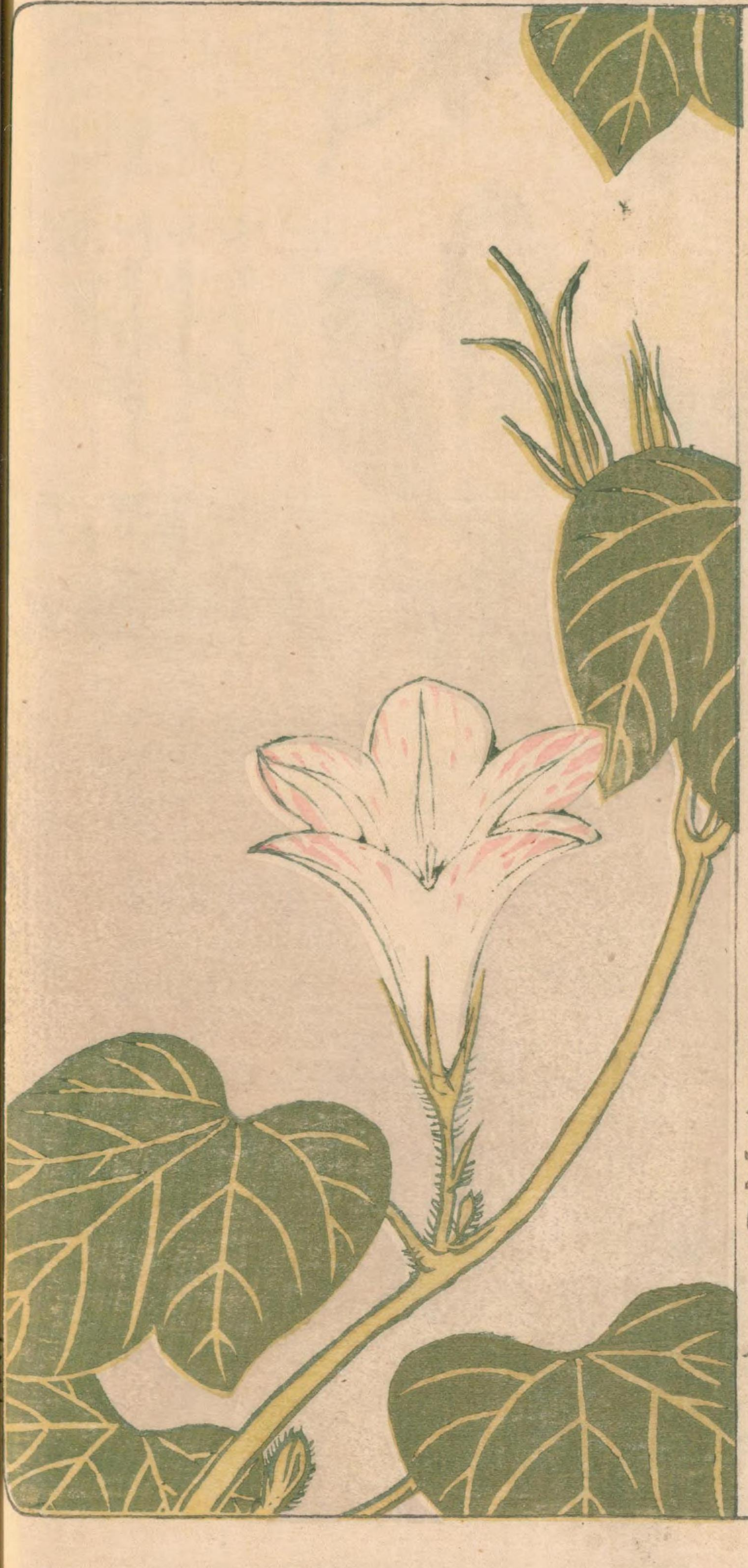
文象来見

○つまんぐり咲（ざき）又桔梗咲（ききやうざき）とも

葉　常のごとくして惣躰（そうたい）より葉ちゞみいらずして細き毛のごとくなみうちゆるよ
葉の光澤（つや）なし

花　五弁にして先き細く内へ入巻（まき）蕋（しべ）なくして皆（みな）ひらき又はまれに八花弁（くわべん）綴（つゞ）く
して花のなり又蕾（つぼみ）のようにて花弁（くわべん）の先き（さき）ひらきても咲くあり

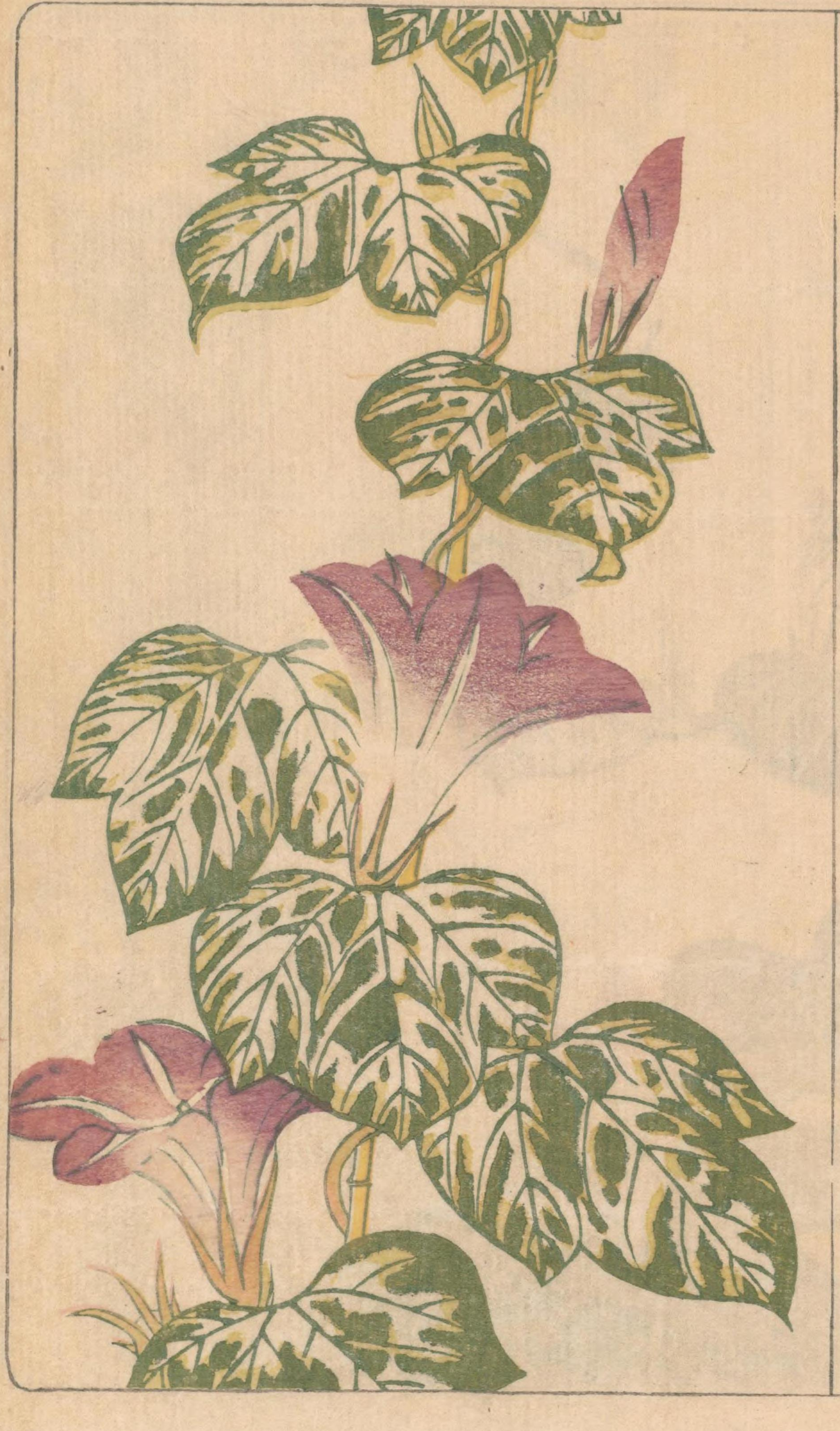
○淡花田○薄花田○薄紅○浅黄○白○白覆輪○紅小しぼり　右余未見



○いさゝ葉つまんぐり咲

葉　葉に桔梗のごとくいさゝ葉なり

花　前におなじ○地に花田ニ弁通○薄紅○浅黄○濃花田○紅　右余未見

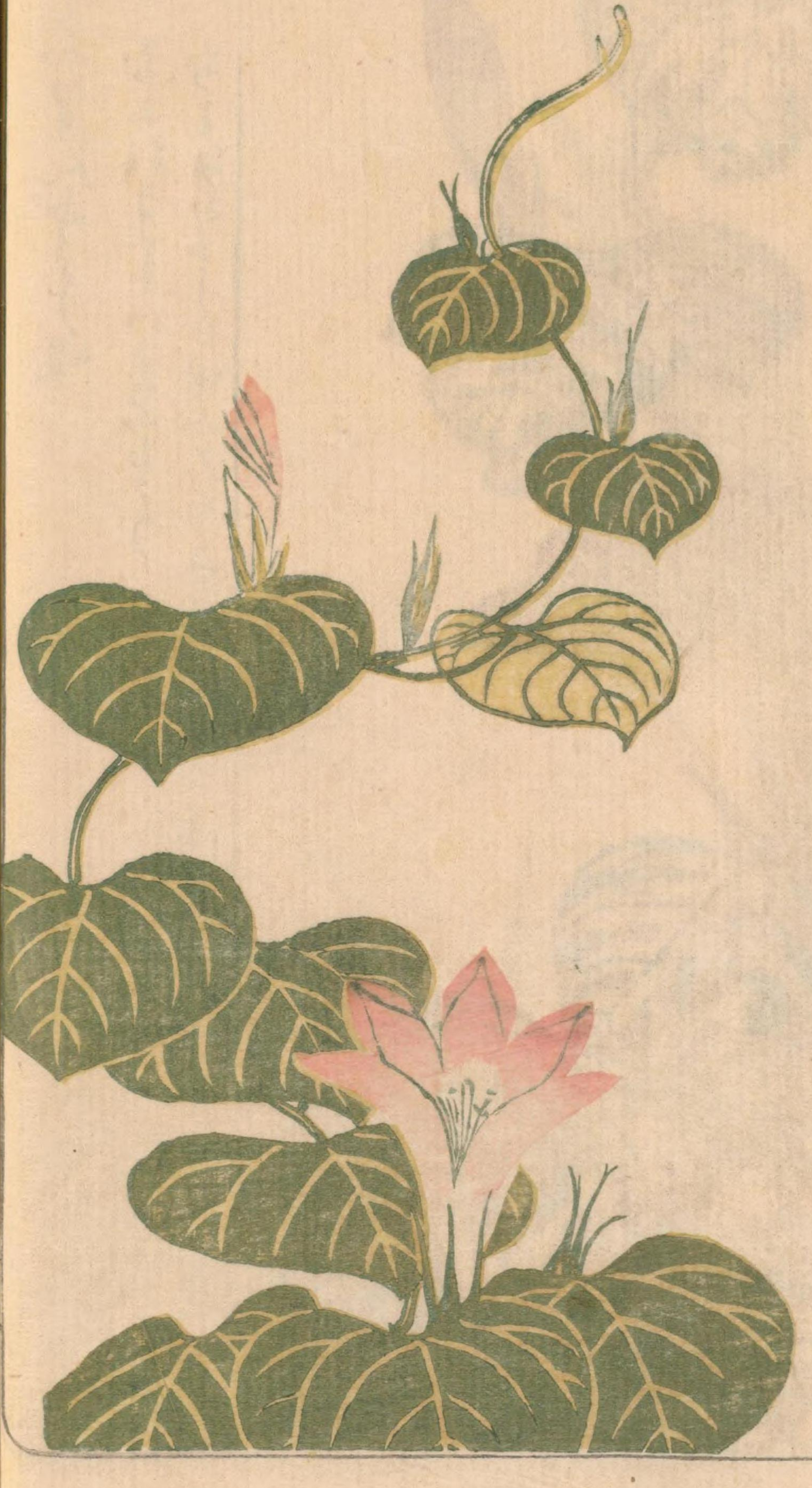


○葵葉（あふひば）つまんぢゞみ咲

葉　賀茂葵（かもあふひ）のかしらに似てまるみならずちゞく　葉に光澤（つや）なし　葵葉のちゞみ咲よりも

葉小なりいさ紫のとれあらん

花　右におなじ　○藤色　是余未見

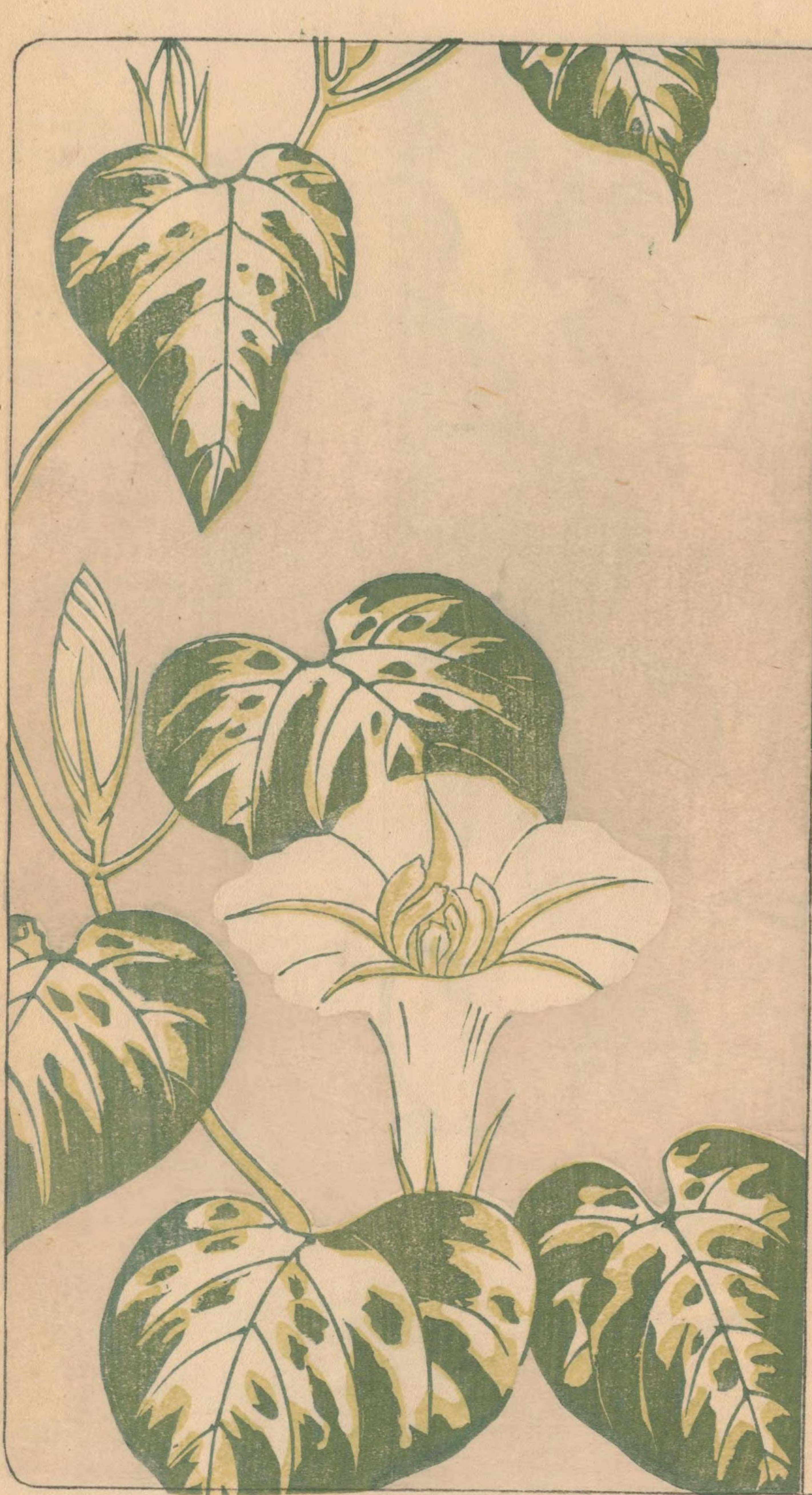


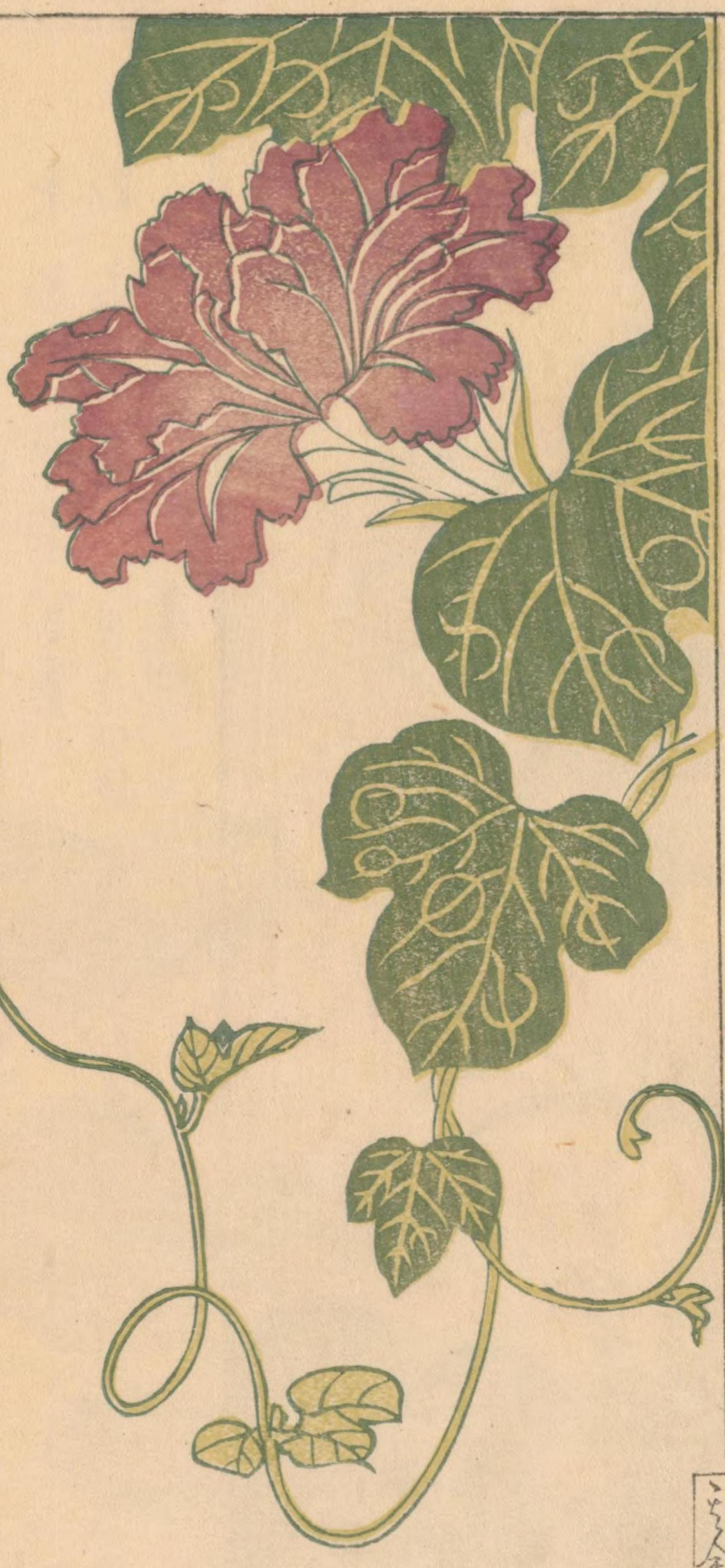
○いさ紫孔雀（くじゃく）咲（ざき）

葉　右におなじ　いさ葉

花　右におなじ　○るり○縹○浅黄○紅志ぼり○白○地浅黄花田のかすり

○藍　是余未見





○綫（しづ）が家（や）

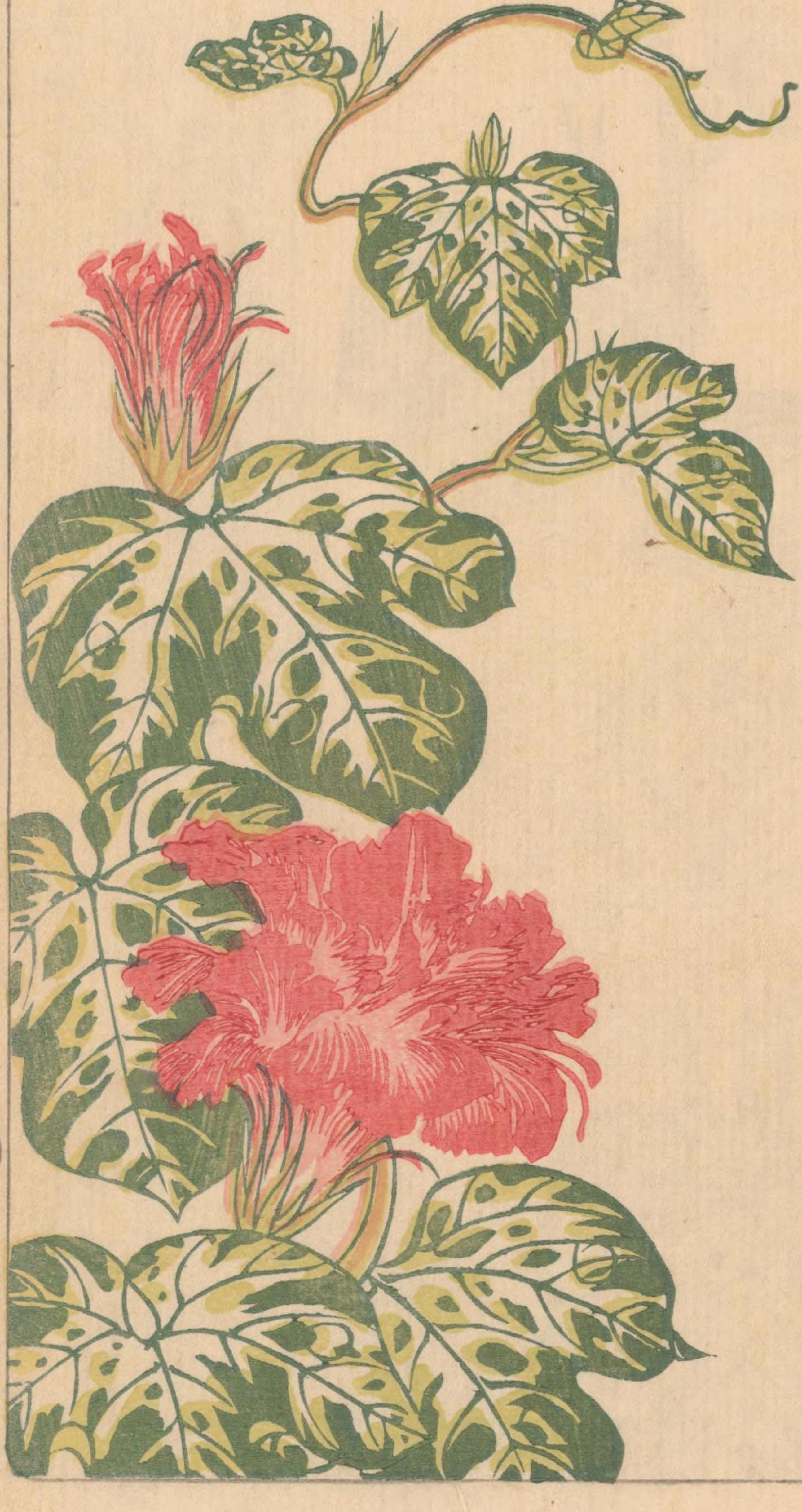
俗に乱獅子（らんじし）といふ
又は獅子白髯（しろひげ）などいふ

余が名づくる所は花形（くわぎやう）定（さだ）まらずして且荒（あれ）るゝが
さびしくよりて名づく

葉　常葉にしておしちゞみて凸凹（でこぼこ）あり

花　紺にて切（きり）まく咲くさまじくしも花形（くわぎやう）定（さだ）まらずして日々変（かは）るゆゑに好者（すきしや）是をいふきのよ
そうらへはよく咲く得るなどいふものゝ多くきれいくものゝ大才五六分（ぶん）ありきのいぬ七
無に切まる花形目にうるはしく咲くことは花之稀（まれ）也○淺花田○花田○白
○紅○紫○嵐○薄紅しぼり○地は花田かすり○地は花田小しぼり○水淺黄

これ余未見



○いさ紫綫（しづ）が家（や）

葉　前にかはれどいさゝか

花　前に同し紫色の色なくして多く切まくるゝもの紺（ちやうぐわち）樫くし紋又石榴（ざくろ）なとく
りふされ綫（しづ）が家（や）なくりされば種く縮も同じ花形うそぎついなくなど
まいりくきりきれるべし○紅○白

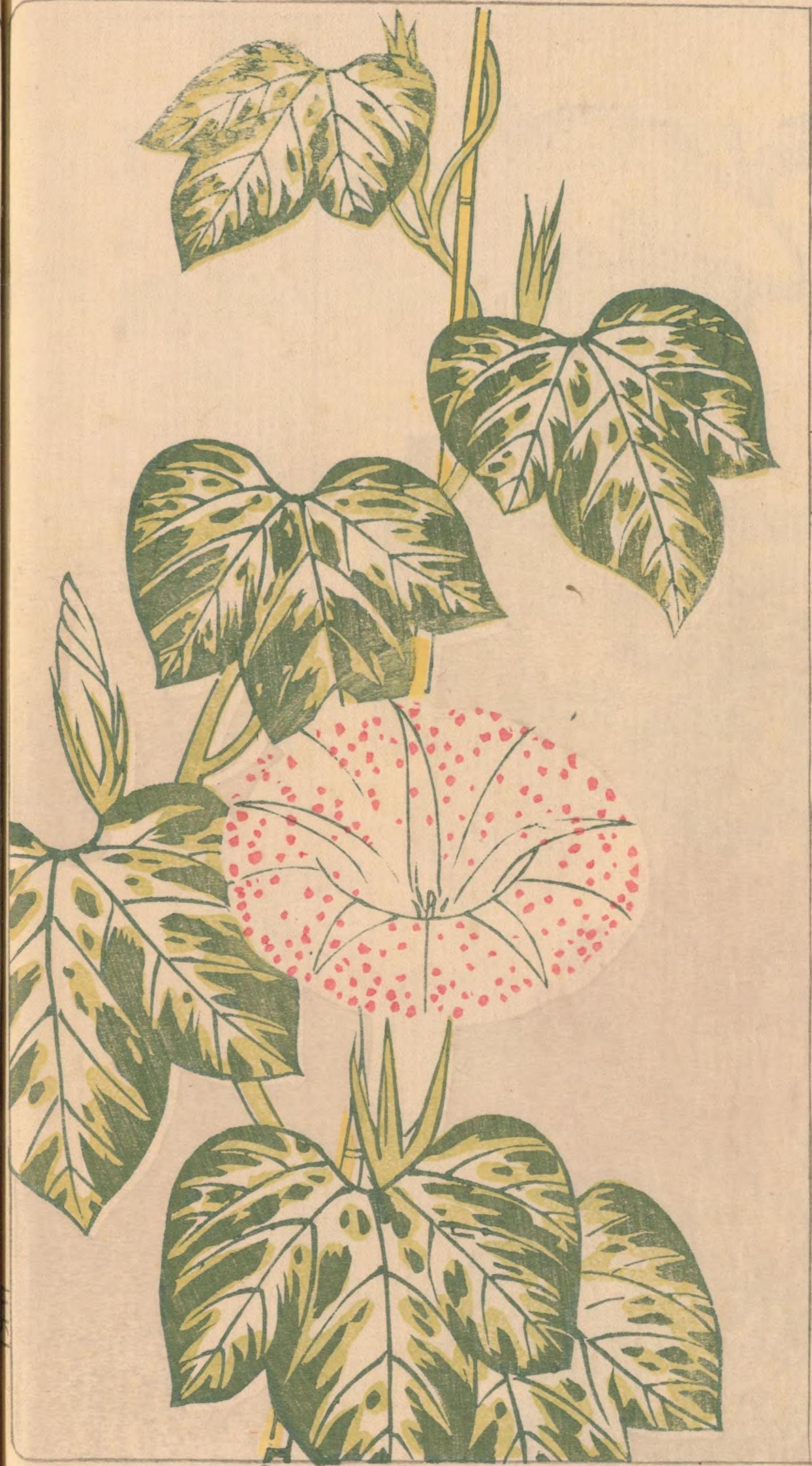
これ余未見

○いさ紫模様丸咲（もやうまるざき）

葉　常葉いさゝかなり

花　丸咲　○地白紅絞り　○地唐茶花田一筋ずり　○地濃茶花田星入（ほしいり）　○花田絞り

○紫小しぼり　○地紅花田一筋つまり　とゝ余来らん



○霧紛色（きりまぎれ）

葉　常葉にていさく

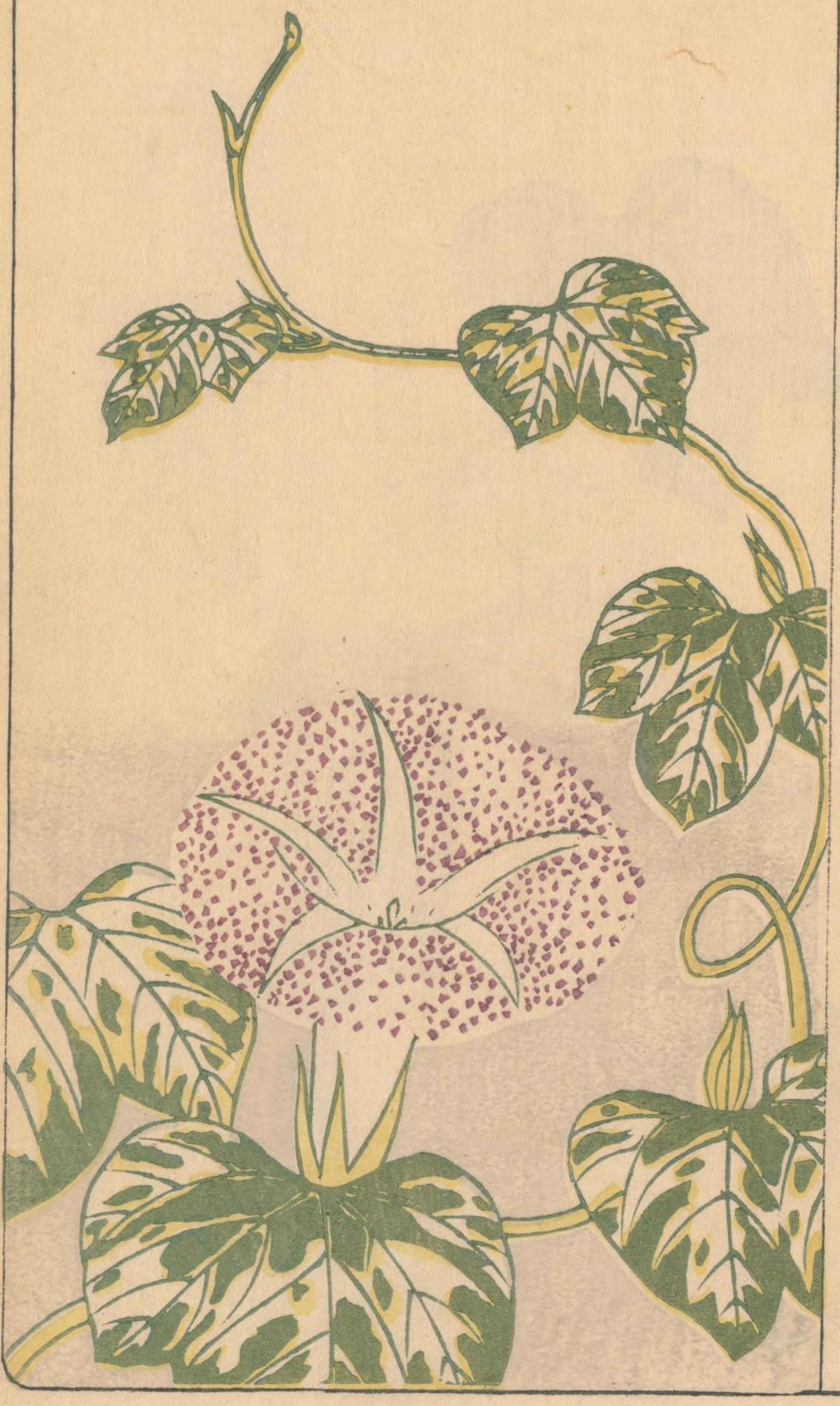
花　丸咲　○地白濃紫（こむらさき）ちりんしぼり圖（づ）のごとく花蕊（しべ）は外よりみゆるしぼる模様多し

すくなし

余名づくる所は花の模様（もやう）朝ぎりの色（いろ）かくるゝを見てたゝる清くの

新ちうゝ菊採好君のおふかさ□きりの中よりたのあるてきよく

おちこち人の袖も見えてをかしよて名づく

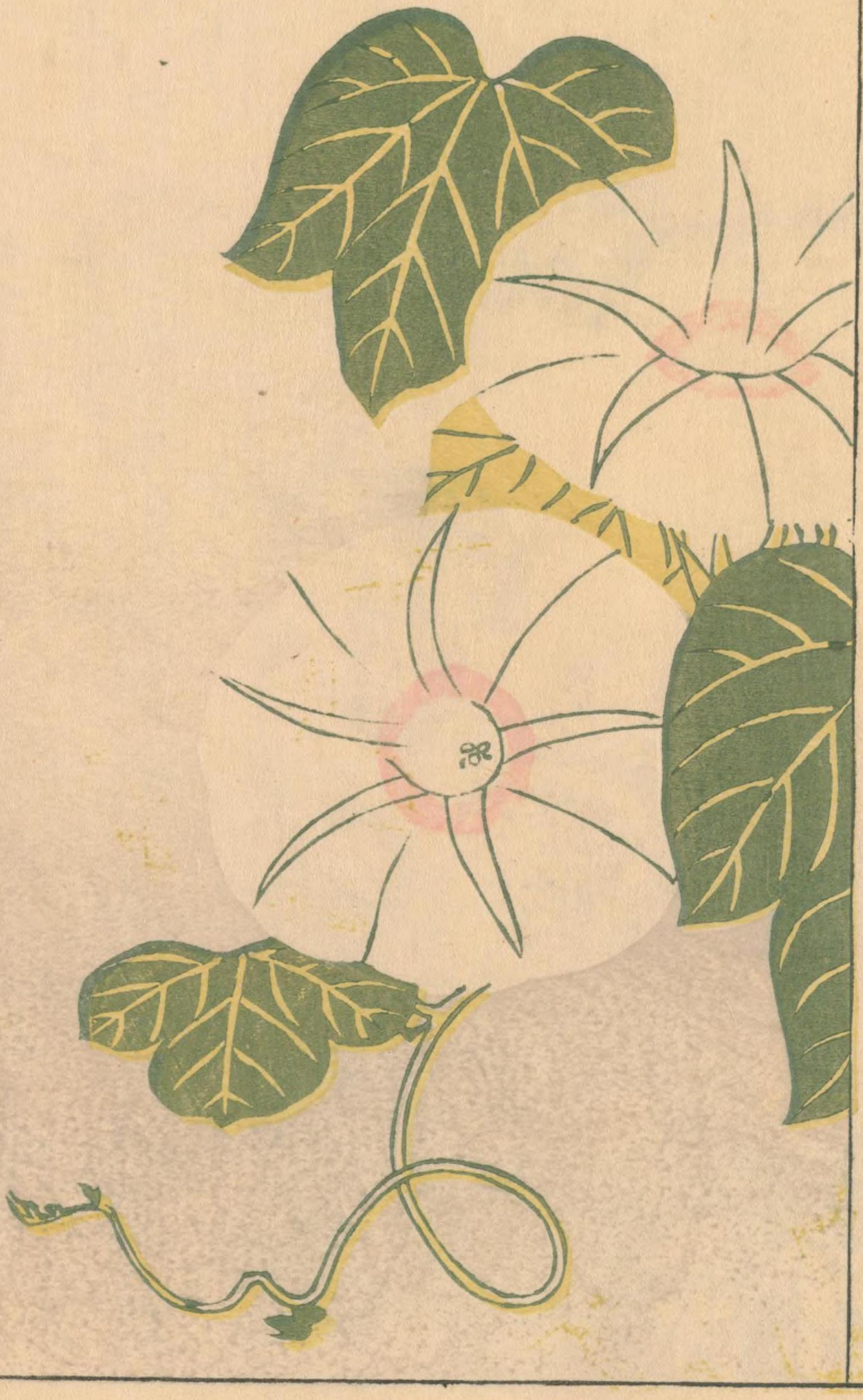


○銀月（ぎんげつ）

葉　常葉にいさゝかちゞみのある也

花　丸咲○白底紅（そこべに）図（づ）のごとく上へうつりかゝり見れく画（ゑがけ）るごとく際（きハ）だちて見ゆる花　底紅の上輝（ひかり）あるものなり

余が名づくる所底紅（そこべに）のうつるは田面（お）のてる月になぞらへて名づく



○越路の月（こぢのつき）

葉　常葉にしていさゝかなく

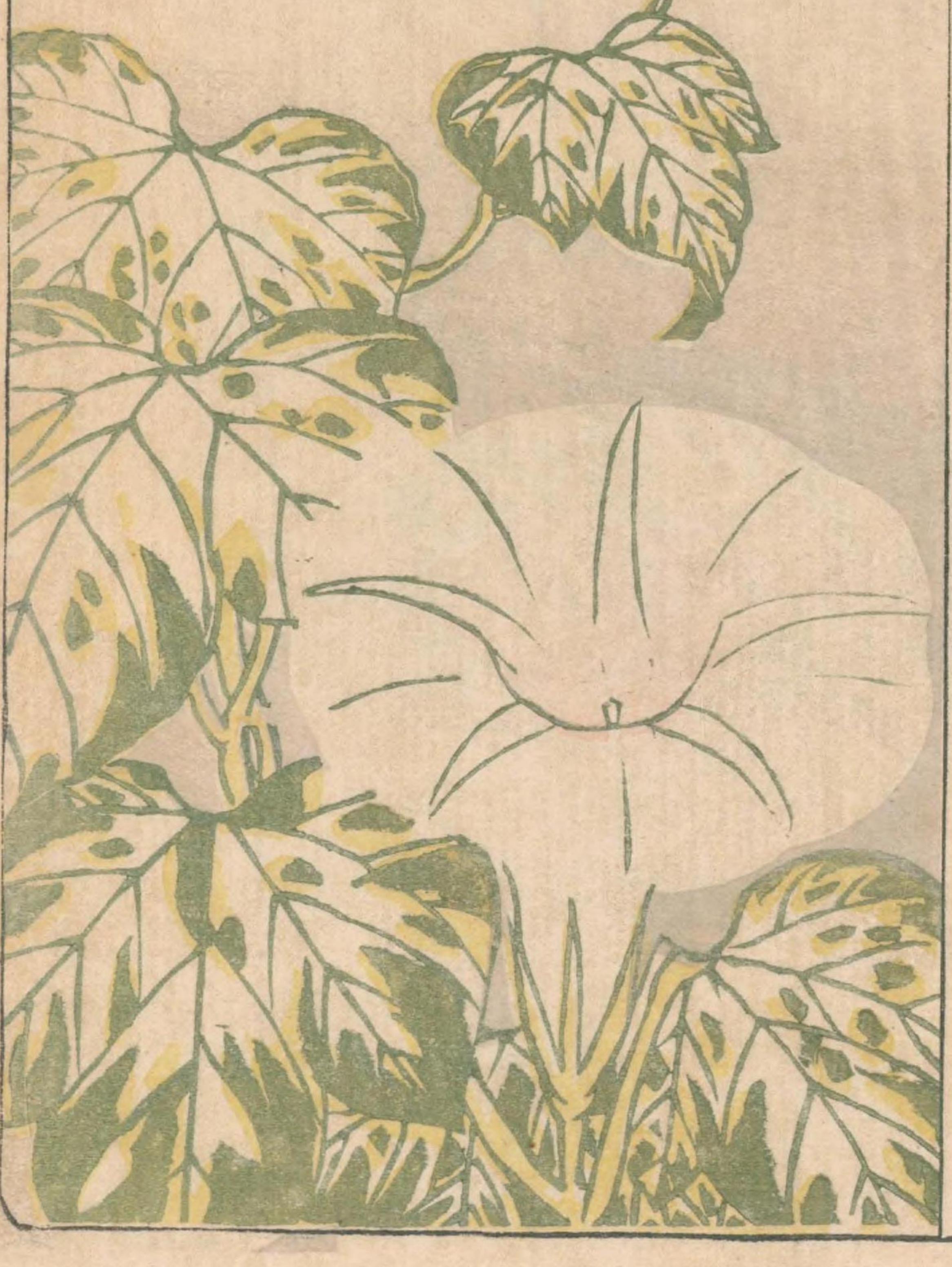
花　丸咲○白底紅銀月と異（と）にして図（づ）のごとく上へうつりなきより縮（ちゞ）咲　又縮（ざ）咲にの底紅なるもあれど此類なり

余が名づくる所銀月と違ひあるとせる所なし　されバ雪の越路の月なぞらへて名づく

○朧月（おぼろづき）

おぼろ越路（こぢ）の月のいさゝか紫になりかゝるものなり

余が名づくる所あまりかはらずといへどもいさゝかにかはりあれバ霞の立たるにおぼろ月なぞらふ

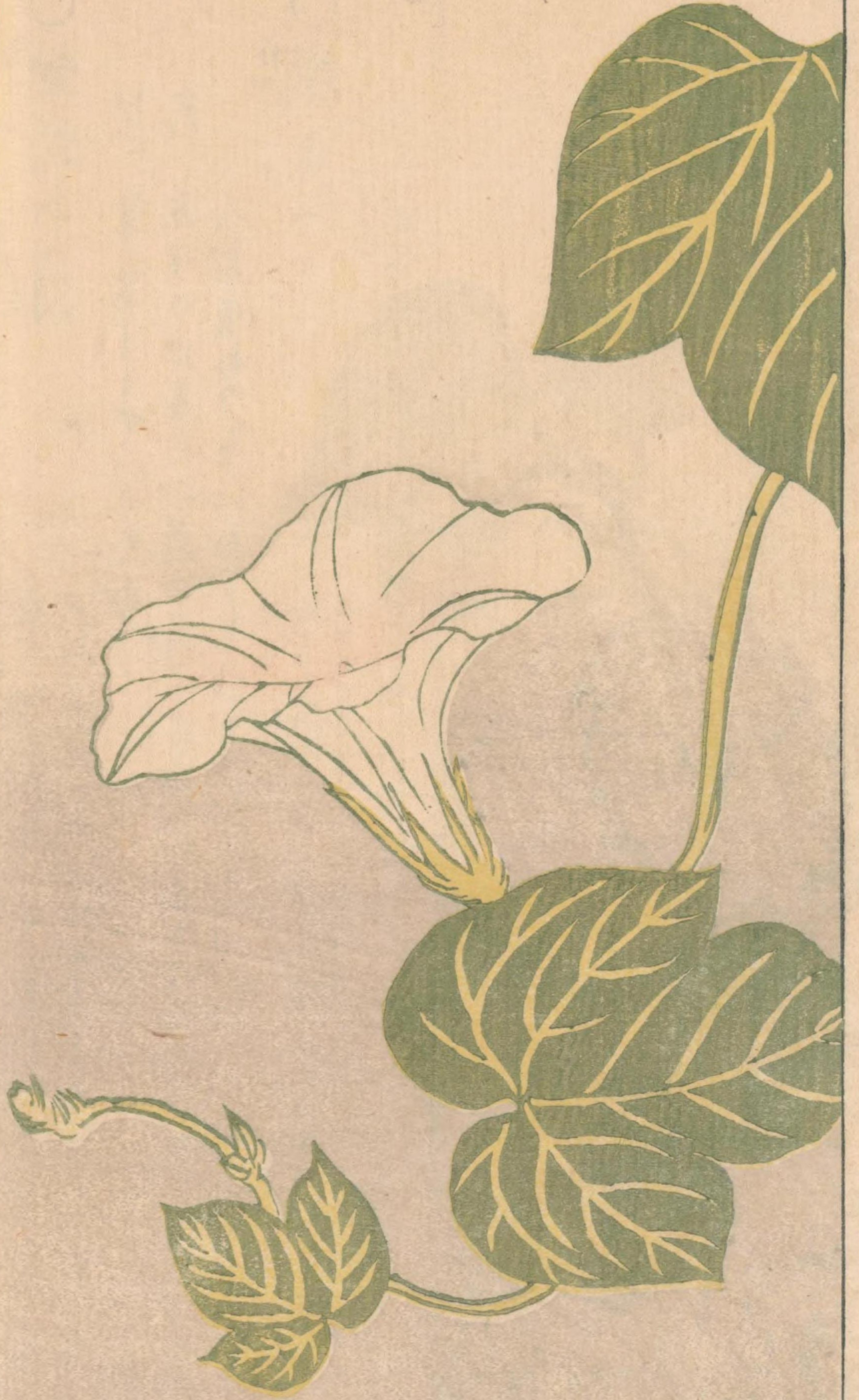


○朝霞（あさがすみ）

葉　常葉にいさゝかのふ斑あり

花　丸咲○諸侯方の花田のしぼりをもとを多く作り接穂とりしかれども
上覧に入てわらじ又地の濃黄一輪もしりとれりの一種なり

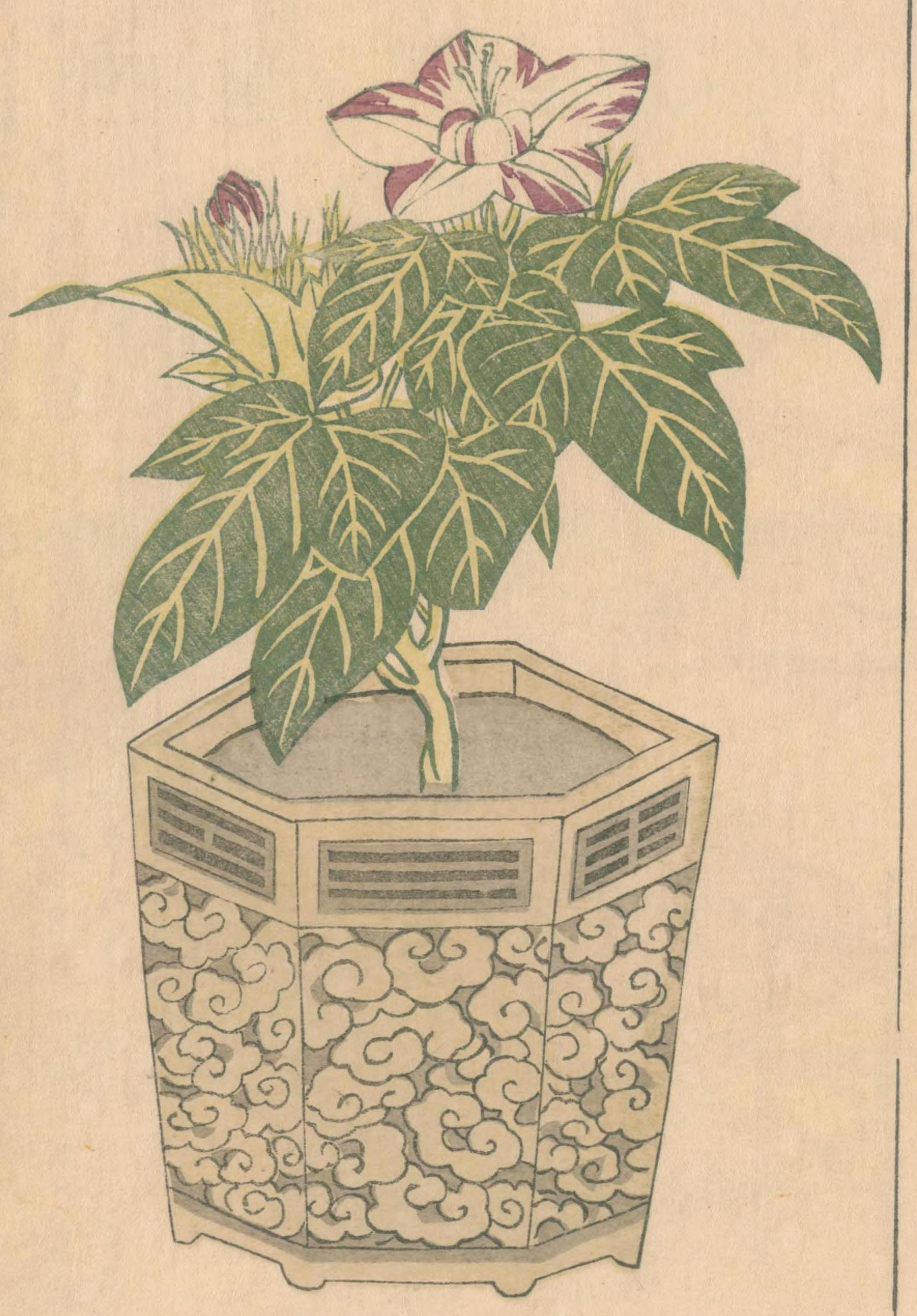
余が名付し前名のことなり　しらさのこ



○木立錦咲（きだちにしきざき）同上

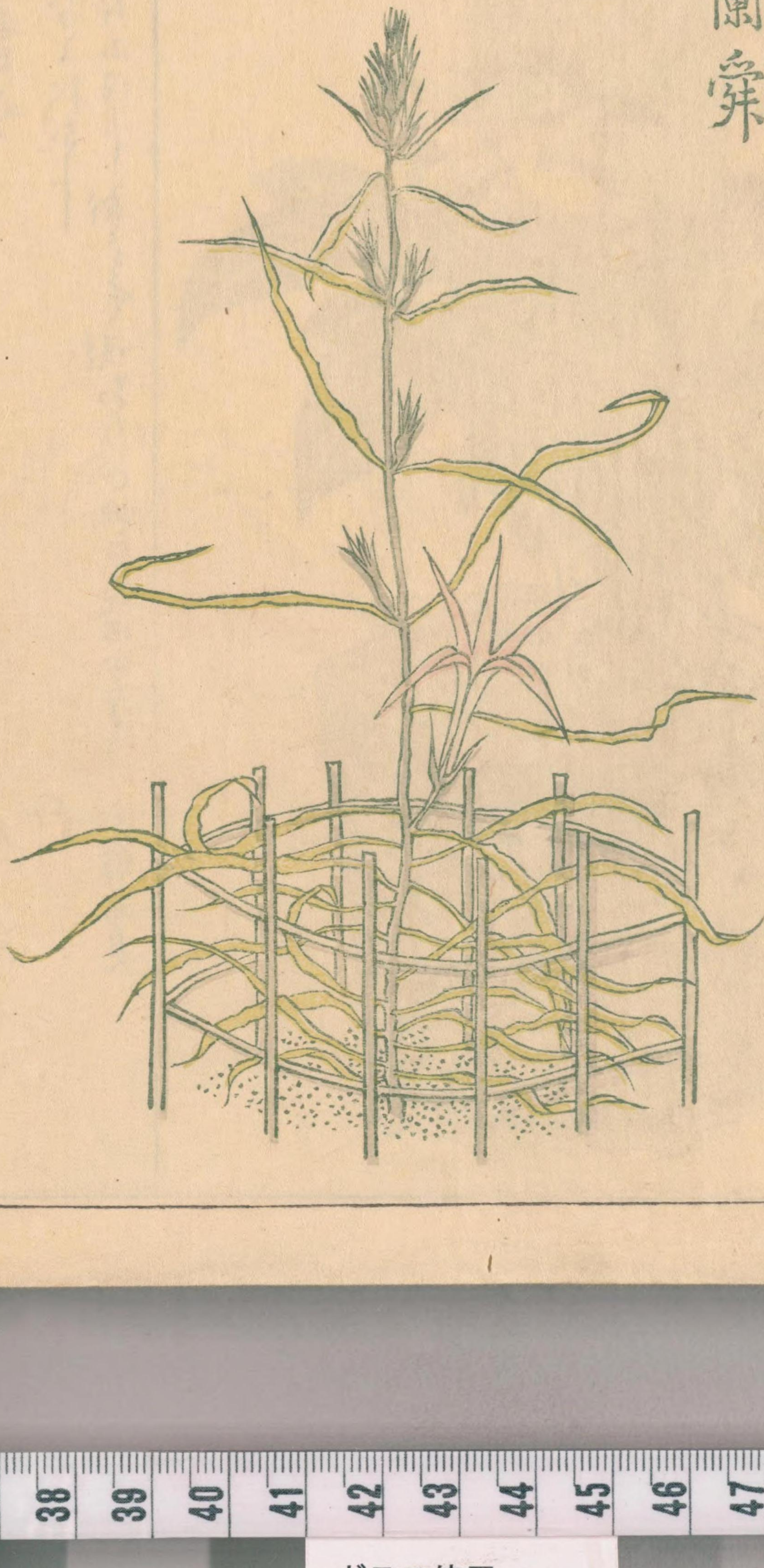
葉　青丸葉

花　青ふ同じ絞りて咲あり ○地白花田しぼり　三朋来見

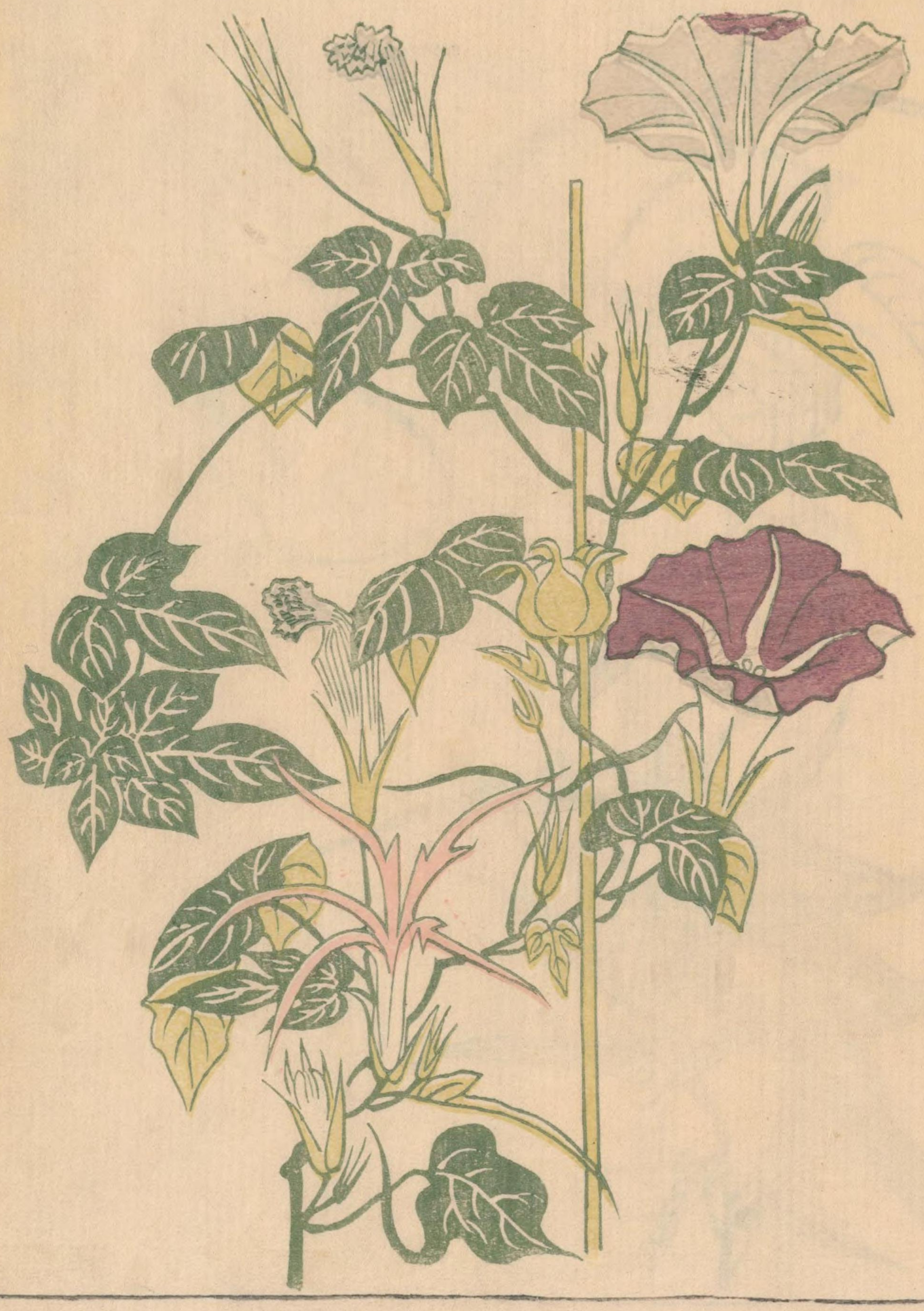


○此一種余今年はじめて見る珍花あり摘するに肥の気もあらん
実を結ぶものなるべし次是より実をとりて牽牛花を生ぜバ古渓の珍
花あらん惜むべし実のなきのみ肥のぼせのものハ凡俗ならしるす

○紡蘭蕣

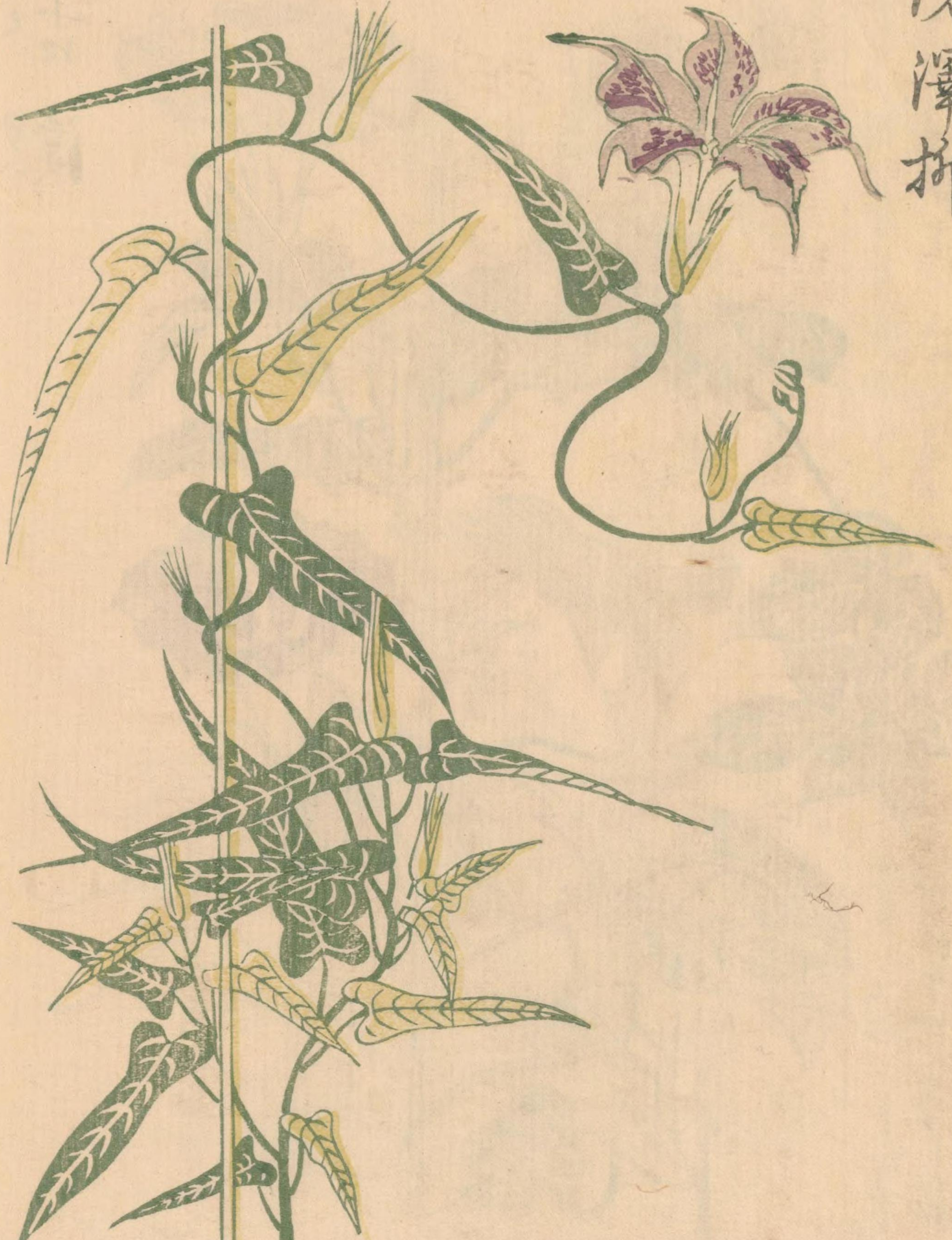


○古渓



国立国会図書館　タイトル『朝鮮珍花莽集』 請求記号 214-3
ガラス使用

○浅澤柳（あさざわやなぎ）



自跋

植物非一故有萬卉之稱葢牽牛花者花内之清奇而其品各有異且不可子細揣度矣今余所植之牽牛花者凡其種四十種其品一百六十六品其因豊壤磽确之地有作異者是其係地勢所而余不取之謂也然擧

ガラス使用

其一二以爲證而已于茲適二三子
来請抄出品類圖考之起草木之以
惠於世之同好者余素有愛草花癖
乃卒爾紀之云
文化甲戌秋九月峰岍正吉書

214
3

畫工
丹羽桃溪寫眞
三木探月齋寫眞

文化十二年乙亥春二月發兌

書房
京
江戸
大阪北久太郎町四丁目
淺田清兵衛

214
3

帝國圖書館藏

ガラス使用